

## はじめに

この世に存在するものにはおよそ名がついている。とりわけ人間にはそれぞれ固有の名が付いている。

私にも東由佳梨という名がある。私はなぜこの名をまとい生活しているのか。東由佳梨という名で呼ばれ、自分のことを東由佳梨と名乗り生活しているのか。ある時ふと考えるようになった。「東」という名字はどこで生まれ、なぜ私は東という名字を受け継いでいるのか？」「由佳梨という名の名付け親は誰なのか？」「どうして由佳梨という名をつけたのか？」「そういえば私にはニックネームがないな。」自分の一番身近な持ち物のひとつである名に対して様々な疑問が次々と浮かび上がった。

きっかけは自分の名であった。私の名に対する関心は日々高まり、その関心の矛先は先祖のことや、自分の命名事情について知ることだけにはとどまらないようになった。もっと名に関するおもしろい事情、文化を知りたいという思いが芽生えた。身近な人々が持つ名、メディアなどを通して眼にしたり耳にしたりする名に自然と注意が向くようになっていた。

そんな中、私は新しい名の文化を目の当たりにした。2004年夏。初めて訪れたタイで出会った“チューレン”というタイのニックネーム。日本とは、そしてそれまでの自分の中にあつたものとは全く異なり、タイ独自の名に対する意識、名の使用方法があることを知った。それまで私に関心を持ち注意を払っていたのは日本の名に関するものばかりであったが、新しい名の価値観、使用方法に触れたこの時の衝撃はとてつもなく大きく、日本とタイ、二つの国の名の背景にあるものを探してみたいと強く思った。

近年では人間が姓名を持つことが当たり前すぎてそれぞれの姓名の由来や意義を考える意識は薄くなってきている。しかし、たった130年前、日本で名字を持つことが常識ではなかった時代があったこと。現代のタイにおいてはニックネームを持つことが当たり前の風習になっているが、80年前のタイのおいてもそうであったのかといえばそうではなく、タイ人がニックネームを持つに至ったには経緯があること。私が考えていた以上に名というものは奥が深く、そしてそれぞれの社会、それぞれ個人の文化、アイデンティティを映す一番身近なものであるという認識が募っていった。

名を持つ意味の奥深さ、そして名に潜む背景や人々の価値観や認識を解いていくことによって思いがけない奥行きのある世界が開けてくる。私はこの卒業論文で姓名を取り上げ、研究を続けていくにつれてますます“名”に惹かれていった。

# 第1章 名とは

## 第1節 名とその意味

私たちは生まれてから死ぬまで、朝起きてから夜寝るまでいつきの休みもなく固有名詞を扱い、固有名詞をまとい生活している。一定の発達段階に達した人類が共同生活を営むにあたって、あらゆるものを便宜的に区別する必要上、固有名詞すなわち名前が必要になったのは当然である。現代社会では、人やものが固有名詞で呼ばれるものであり、また呼ばれなければならないということは、経験を通じて徐々に学ばれるものではない。たとえば、こどもが入学した学校の名をおぼえさせることによって一挙に教え込まれるのである。この過程を通じて、こどもは自分が一つの制度の中に繰り入れられ、ある組織に所属するのだという意識を植え付けられるから、固有名詞はこどもを社会化するための基本的な道具となり、人間は死ぬまで固有名詞の支配下に置かれるのである。固有名詞こそ、人類が、決して一つではなく、さまざまな名前一固有名詞をもって分かれ、それぞれが自分あるいは自分たちに対立するものであるということを思い知らせ、相互の違いをいやが上にも際立たせるもの。そしてそれを固定させる道具である。名、固有名詞こそ、ことばの中でもぬきんでた地位を占めていて、これこそことばの中のことば、名詞の中の名詞だといってもいいくらいである<sup>1</sup>。

固有名詞は独特の雄弁さを持っている。人が持つ名というのももちろん固有名詞に含まれるのであるが、最初に述べたように、人間は生きている間のほとんどの時間を、名とともに生きている。

日本において、また多くの国々において人の名前を見れば、まずその人が男か女かがわかる。ことによると、年齢、だいたい生まれた時代もわかる。靖や勝などの漢字の使われた名前は戦争あってこそ、当時の日本人の芯にあったものを表した名前である。今日、生まれてきた男の子にクマゴロウだのゴロザエモンだの、かつては普通であった名前をつける親はいないだろう。それは、現代ではかなり突出していて、目立つ、古めかしい、もしかしら近代教的教養の香りのしない名前だと受け取られるおそれがある。

人の名というのは、便宜上区別するためだけに与えられた固有名詞ではない。その人の人格を知らずとも、その名だけである程度人間像を映し出すことが可能なツール、もちろん人間関係を築いていくにあたっての入り口であるのだ。私達人間はこの入り口をくぐり、社会への道を開いてくれた名と共に生活を送っているということになる。

---

<sup>1</sup> 田中克彦 (1996) p.9

## 第2節 名の種類

“名”と言っても、種類は様々である。姓に氏、名字に苗字、名にあだ名、ニックネーム……。名はその本来の質からいくつかに分類し、名称も様々である。今回姓名についての論文を書くにあたり、まず名の種類、そしてそれぞれが本来持っている意味を明らかにしておきたいと思う。

### 1. 氏、姓、名字、苗字

「みょうじ」を「名字」と書くばあいと「苗字」書くばあいがある。学校教育の場では「みょうじ」を「名字」と書くのが正式のものとされている。これは文部省が「名字」を用いるからである。そのおかげで、近年は「苗字」の表記を用いる人は少なくなった。一方、法務省は「氏（うじ）」を正式の名称としている。そこで法律上は「氏名」・「氏」が使われる。「氏」の表記を使えば、「氏名」と簡単に書けるが、「名字」を用いると「名字と名前」とでもしなければならぬ。「氏名」に似た表現に「姓名」がある。現代では「姓名」の語は受け入れやすいが、「姓（せい）」となるとわかりにくい。「姓氏」の語もある<sup>2</sup>。

このような表記の複雑さは、名字の成り立ちを探る一つの手がかりになる。

「氏」、「姓」、「名字」、「苗字」は、歴史的につぎのように区別できる。<sup>3</sup>

「氏」とは、もとは古代の支配層を構成した豪族をさしていた。「藤原氏」、「大伴氏」、などがそれにあたり、「氏」の構成員は朝廷が定めた氏上（うじのかみ）に統率されていた。一方、地方の中流豪族や庶民は「氏」の組織をもたなかった。

それに対して、「姓」は天皇の支配を受けるすべての者が名乗る呼称とされた。

古代の豪族層と一部の上流農民は、天皇から「朝臣（あそん）」、「連（むらじ）」などの「かばね」を与えられていた。そして、庶民の多くは、「山部（やまべ）」、「馬飼（うまかい）」などの「かばね」を含まない姓でよばれていた、「藤原朝臣」といった支配層の呼称も、「山部」などの庶民の呼称も、ともに「姓（せい）」と表記された。

平安時代末に武士のあいだで生まれた通称が「名字」である。そして、それは当初は姓と明確に区別された。たとえば、北条時政の名字が「北条」で、かれの姓は「平（たいらの）朝臣」である。平安時代なかばから「かばね」が省略される場面が多くなった。名字が広まると姓はしだいに日常生活でつかわれなくなっていった。「名字」の「名（きょう）」は領地をあらわし、つまり、「名字」とは「領地の地名」といった意味になる。

それが、中世には特に、「出自をあらわす名」を意味する「苗字」と書かれるようになった。そして江戸幕府は「苗字」を正式の表記とした。そのため、武士身分をあらわす

---

<sup>2</sup> 武光誠（1998）p.12

<sup>3</sup> 判別は主に、同上 p.13に依拠して論述した。

「苗字帯刀」などの語ができた。第3章 日本の名字で取り上げる明治時代はじめの「苗字必称令」は、幕府の用法に基づくものである。

このような歴史があることから、中世の「みょうじ」を「名字」とし、江戸時代のものを「苗字」と記す学者もいる。しかし、両者は同じ性格をもつため、この論文においては、「名字」に統一したいと思う（ただし、明治時代の苗字に関する法令について記述するばあいは「苗字」の語を使う）。このように「姓」や「氏」は元来「名字」とは別のものだが、のちに「名字」と混同された。明治時代以降、しだいに「苗字」と「姓」の表記が用いられなくなり、一般に「名字」、「氏」が使われるようになった。

## 2. 名、名前

こちらは先に取り上げた「みょうじ」のようにはっきりと区別されてきた歴史があまりなく、曖昧ではある。『広辞苑』（新村出編）では、

「名＝1・・・有形・無形の事物を、他の事物と区別して、言語で表した呼び方。

- ① 事物（の概念）を代表する呼称
- ② 特に人や人にじゅんずるものにつけた呼び名。姓・氏など家名に対して実名・通称など個人名をさし、また姓氏とあわせたものをさす。
- ③ 実質が伴わないただの名目」

「名前＝1・・・氏名。特に苗字に対して、名

2・・・名称、名目、名義」

とある。これを見る限り、大きな違いはないようである。本論文においては、姓、名字、ニックネームなど、名に関する概念の総称として「名」、「名字」に対する個人名のことを「名前」と統一し、表記する。

## 3. 本名でない名前

戸籍によって管理されている本当の名字や名前の他にも、名は存在する。第2章 タイと名でも述べることになるが、**ニックネーム**、**あだな**、**愛称**、などがそれにあたる。『広辞苑』（新村出編）には、この3つについては以下のように定義がされてある。

「ニックネーム・・・あだ名。また、親しんで呼ぶ名。」

「あだな・・・その人の特徴などによって実名のほかにつけた名。あざけりの意味や愛称としてつけられる。」

「愛称・・・正称のほかに、親愛の気持ちをこめてつけた呼び名。」

同じあだなでも仇名とか徒名になると、異性間についてのうわさあるいは常時の評判と違って意味合いが違い、本名とニックネームに関係なく使われる。元々、“あだ”ということばには「他」や「異」の意味合いが含まれる。

本論文において、本名とは異なる名前については、ニックネームとさせてもらう。これは、後で述べるタイの文化について触れていけばわかることだが、ニックネームにはときにからかいの意味が含まれたりもするが、主に「ニックネームを付ける」というとおおむね好意的に付けられることが多いからである。

同じように他人から呼ばれても、称讃や皮肉、やっかみや軽蔑など、好意的とは限らない多様なニュアンスで付けられる名前もある。たとえば、**異称**や**別名**、あるいは**異名**がそれだ。正式名ではなく一般に通用している名前は**通称**、**通り名**などがある。

以上に挙げたものとは異なっているが、人から呼ばれる名に**おくりな**がある。死んだ人に、生前の徳や行いなどに基づいて贈る称号で、のちの**いみな**である。また戒名や追号の意味でも使われる。

他人に呼ばれるのではなく、自分から本名を隠して別につける名には**偽名**や**変名**があるが、これらにはどことなくうしろめたい、犯罪めいた雰囲気を感じられる。偽名は本当の名を隠し、いつわること、変名は本名を隠してほかの名を使うことである。本名を伏せて一時的につける**仮名**も、ニュアンスとしては近いものがある。**匿名**も自分の本名を隠して別の名前にするので、匿名批判などとあまりよくない意味合いで使われることが多い。

同じように自分から名乗る場合でも、**ペンネーム**や**号**となると知的で優雅な雰囲気になる。**雅号**・**雅名**とも言われ、俳人が用いれば**俳号**となる。

バーやクラブなどで客を接待する女性が本名で仕事することはほとんどない。このような仕事に就く女性が名乗る名のことを**源氏名**という。これは紫式部の『源氏物語』に登場する夕顔、浮舟、などの名に基づいて、宮中の女官に与えた称号であった。これが風習として大名や高家の奥女中にも伝わり、いつしか遊女や娼婦が本名のほかにつけた呼び名へと転化したものだ。<sup>4</sup>

### 第3節 名と人間一名付けという行為

東由佳梨 (Yukari Higashi)。1983年8月29日、私はこの世に生を受け、名を与えられた。東という名字と、由佳梨という名前。それからこの22年間、私はこの名と共に生きている。幼稚園の制服につけていた花型の名札にも、小学生の時のランドセルにも。中学校で定期テストを受ける時も、病院で診断を受ける時も。友達に連絡先を登録してもらう時も、大学生になる際につくった銀行の手帳にも。この名を書き続け、呼ばれ続け、そして名乗り続けている。

私は自分の由佳梨という名前がとても気にいっている。まず画数にこだわりがあるところが好きだ。私の両親は私が生まれる前にたまたま近所のデパートで占いをしてもらったそうだ。その占い師が東という名字には24画の画数の名を付けると一生食べることに關しては苦勞しないと云ったそうで、響きやイメージを考える前にまずは画数にこだわったの

---

<sup>4</sup> 野口卓 (2005) p.102

だと幼い頃聞かされた。ちなみに私は三姉妹の長女であるが、妹 2 人もこの画数にこだわった名前、次女が佳奈枝、三女が沙耶佳とつけられた。画数を決めた後は、東という名字との響きのバランス、漢字の字面のバランスがいいように両親が試行錯誤を重ねてくれたようである。もう一つ私が気に入っているのは梨という漢字が使われているところだ。女の子だから色が白くなるように、梨の花をイメージして父が考えつけてくれたそうだ。こうして、私に由佳梨という名前が与えられた。

どんな名付け親も一人の人間を思って名をつける。この過程はなんとも微笑ましく、幸せなことだと私は思う。名を付けるということは最も人間的な行為といえる。人は、自分あるいは自分達の世界に関わったものや加わったものにまず名をつけて識別し、それを生活や思考の中に組み込んでゆく。

人類がほかの動物と違った進化をした点については、いろいろな理由が挙げられている。二足歩行をしたから、火を使ったから、道具を使ったから、などが主な点だろう。だがそれらは互いに関連していて、二足歩行をするようになったために、大容量の脳を支えることが出来、それが知能の発達を促したと考えられる。人類はほかの動物とは違った道を歩むようになったのであるが、確かにこの関連性も大きく影響したに違いないが、人間を人間たらしめたのはすべてに名をつけて識別したからではないかと考える<sup>5</sup>。ほとんどの動物は、向こうからやってくる生き物が危険であるかそうでないか、色の綺麗なキノコが果たして食べられるのか食べられないのか、そのような生存に関わる点でしかモノを識別しなかった。それは、本能の範囲であって、生き延びるために最低限必要なことではある。しかしそれ以上の発展はない。

人類は違う。動植物や鉱物だけではない、さまざまな道具類、それを使って作り出した建物や衣類、武器、芸術作品、ともかく周囲にあって見えるあらゆるものを名付けて生活に取り込んでしまった。さらには、感情や音楽のように見えないものにさえ名を与えて識別した。これによって記憶し、知識を蓄積でき、思考を深めることが可能になったのである。

名やタイトルをつける行為は、単にそれを他と区別するというだけではなく、新しい生命を与えることでもある。特に人名の場合、少なくとも数十年はその名で生きてゆくことになるのである。名前のためにからかわれたりしてはならないし、立派すぎて名前負けしても困る。どのような人に育つかわからないのに名前をつけることになるので、親は真剣になり、当然のように期待をこめて名付けることになる。名前にしろ、作品のタイトルにしろ、面白がってつけたり、適当につけたりしてはならないのである。逆に名やタイトルが魅力的であったり、強いイメージの喚起力があつたりすると、その本人にまで魅力や喚起力を感じることにつながる。

名付けという言葉で誰もが思い浮かべるのが新生児の命名だろう。現在の日本では原則

---

<sup>5</sup> 野口卓 (2005) p.53

として一度名をつけると変更はできない<sup>6</sup>ので、本人はもちろんのこと周囲の人も生涯を通じてその名前と付き合うことになる。特に長期間にわたって育てる両親にとっては、いつまでも愛情をこめて呼べる名前にしたいものである。

名付けの権利を難しいことばで「命名権」というが、その本質については法理論的定説がなく、次の三つに分かれている。<sup>7</sup>

- (1) 親の持つ「親権」の一つである。
- (2) 命名される者（出生者）固有の権利だが、親権者が代行している。
- (3) 命名の基礎は命名すべき出生者にあるが、親権者が事務管理者として代行している。

この三つを考えるにあたり、命名の「権利」は親にあるのか、子にあるのかと言う問題が浮かび上がる。親権というのは子供を育て、教育し、監督し、その財産管理などを行う親の権利や義務を指す。そのような権利を乱用したり、逆に必要な際に行使を怠ったりした場合には、民法の規定に従って親権喪失を宣告される。名を付ける、付けられるということはそれほど責任を負った行為だということだ。

名前を付けるにあたり夫婦それぞれの両親や祖父母、仲人、尊敬する人物などに相談し、名付け親になってもらうケースもあるようだが、現在ではほとんどの場合、夫婦が相談してつけるのが一般的なようだ。私の名前も、私の妹二人も両親、特に父が考えつけてくれたものである。日本において名前の届出の期限は誕生から14日目とさほど長くはないものの、懐妊がわかるのは予定日の7,8ヶ月前なので、名前決めのための時間はたっぷりある。昔は男か女かわからないので両方の名前を用意したものだが、最近は生まれる前から性別がわかるので、絞込みが容易になった。自分の子だから、どんな勝手な名前をつけても構わないかという、それはもちろんモラルの上からも社会通念上からも許されないのが当然である。名付けのポイントとしては、読みやすいか、発音しやすいか、聞きやすいか、書きやすいか、覚えやすいか、名字と名前のバランスはよいか、性別が紛らわしくないか、縁起の悪い字が混じっていないか、などだ。私の両親のように姓名判断によって画数を重視する名付け親も少なくないだろう。

名前とは一人の人間がこの世に存在する上で社会的に認められるための最初の贈り物である。そこには、名付け親の想いや期待が組み込まれており、世界にたった一つしかない。存在価値が非常に高いものであると私は常日頃感じている。

---

<sup>6</sup> 改生戸籍法によって名字の場合は「やむを得ない事由」、名前の場合は「正当な事由」に限り、改称を認めている。

<sup>7</sup> 紀田順一郎 (2002) p.160

## 第2章 タイと名

タイ料理。タイシルク。タイ人の微笑み。優雅な古典舞踊。日本と同様に米を主食とする仏教国。豪華絢爛な寺院。世界遺産スコータイとアユタヤ。象の国。蘭の花が咲き乱れる熱帯の自然豊かな国。プーケットやパタヤに代表される世界的なビーチリゾート。エネルギーギッシュな水上マーケット。発展する東南アジアの中心地バンコク。タイにはバラエティーに富んだ魅力があふれる。“タイは若いうちにいけ”とよく言われるのもこのような魅力を考えると納得である。しかし、正直なところ私はタイという国に対して当初特に興味はなかった。アジア色の強い東南アジアの一国だという認識しかなかったのが2年前のことである。



《BTS—スカイトレイン》<sup>9</sup>

バンコク名物交通渋滞が若干緩和された。

だ圧倒された。飛行機を降りてバンコク市内へと向かうバスの中、バンコクの町の様子を表すのにふさわしいことばとして“熱気”という単語がよぎった。顔を上げると高速道路から見える携帯電話、液晶テレビ、日本の自動車メーカーの大きな広告看板。ガラス張りの高層ビル。BTS<sup>10</sup>と呼ばれるモノレールに似たスカイトレインが頭上を走る。そして、目線を空から落とすとビル群の狭間の寺院、街中溢れかえる赤と青、黄色と緑の色鮮やかなタクシー、バンコク名物三輪バイクのエンジンに客席付きの車体をのせたオート三輪、トゥクトゥク。舞い上がる埃、収まらない喧騒。目にするものすべてが新鮮で、また私が想像するアジア色の強い文化と発展をとげようとする姿が共存するアジアそのものであった。そして、タイの人々は暖かく微笑んで私を受け入れてくれた。“ランド・オブ・スマイルー微笑の国”と呼ばれるタイランドの人々伝統的に持つ暖かいもてなしに私の中にあっ

そんな私がタイを訪れたのは、2004年夏。昔からサービス業に就きたいと考えていた私はバンコクで行われる外資系エアライン&リゾートホテル現地実習<sup>8</sup>に参加した。海外でのインターンシップ体験を通して、進路に広い視野を持つことが目的だった。初めて訪れるタイに不安と期待を抱きながら2004年8月20日からの約1週間の日程でバンコクに降り立った。海外を訪れたのは、高校の修学旅行で中国の北京を3泊4日で訪れて以来二度目だった。初めて目にしたタイにはただただ

<sup>8</sup> 2004年8月20日から25日にかけての5泊6日の日程

株式会社ISAの企画による『エアラインセミナー&海外インターンシッププログラム』

<sup>9</sup> 世界の旅ホームページより <http://www.uraken.net/world/bts.html>

<sup>10</sup> 運営会社のBangkok Transit Systemの略称。別名はスカイトレイン。

ドイツのシーメンス社とイタリアのタイ開発公社によって設計され、2001年1月に完成



た不安が消えるのに時間はかからなかった。この国で何を目にし、何をすることができるのか期待が高まるのを感じた。

タイのニックネーム文化と出会ったのはインターンシップ先であるタイ国際航空の本社ビルの一室。簡単な会社紹介の後、タイ国際航空のインストラクターの紹介時。一瞬で私の中でこの文化にもっと触れたい！という気持ちが膨れ上がった。今回卒業論文制作にあたり、タイのニックネーム文化と日本の名まえ文化を比較することになった運命的な瞬間だった。

## 第1節 タイの地理

地図1：タイの位置<sup>11</sup>



インドシナ半島のほぼ中央、北緯 5~21 度、東経 97~106 度に位置し、国土の西部と北部はミャンマー、東北はラオス、東はカンボジア、南はマレーシアの 4 カ国と国境を接している。面積は 51 万 4 千平方キロ、日本の約 1.4 倍の広さだが、山林の多い日本と比べ平野部が多いのが特徴である。四方の国境沿いおよびカオヤイ国立公園付近に、若干の山岳地帯があるが、それ程険しい山はない。中央にチャオプラヤー川が流れる。

タイといえば、スイカ、パイナップル、パパイヤ、オレンジなどの色鮮やかな南国フルーツ、アンダマン海の真珠と称されるプーケットに広がる青い海や空が頭に浮かぶ。赤道から北緯 30 度辺りに位置するタイは熱帯モンスーン気候に属す。年間の温度差が小さく、最高気温が中央タイで 33.7 度、最低気温が 24.7 度、平均気温が 28.5 度。5~10 月の雨季と 11~4 月の乾季に別れ、3~5 月ごろはとくに暑季とも呼ばれる。雨季は曇天と突発的なスコールの日が続く。

半島部はカンボジアとの国境に近い南東海岸部では、南西モンスーンの影響で年降水量が 3,000 mm を越えるところもある。さっきまで太陽が照り付け、日差しをさけるようにして歩いていたのに、食事をすませ外に出ると、世も末かと思えるほどの大爆音の雷鳴と共に土砂降りの雨を見上げることも日常茶飯事で



《チャオプラヤ川の側で生活する少年》

(2005. 11.12 東)

<sup>11</sup>外務省ホームページより <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/thailand/index.html>

ある。そんな時、日本人であれば近くのコンビニエンスストアなどで傘を購入する、バイクや自転車を交通手段としている人は顔をしかめたりする光景があるのだろうが、タイ人はこれが日常であるため、何事もないかのように、雨の中を傘もささずに歩く。レインコートを着ることなくバイクにまたがる。タイでは天気予報も当てにならないどころか、タイ人が天気を気にする様子を見たことはない。

日本からは新東京国際（成田）空港、関西国際空港、名古屋空港、福岡空港から直行便がある。2005年10月31日からは福岡ーバンコク間の直行便が増便になり、現在は週7便、毎日福岡からの直行便がバンコクに向けて就航されている。福岡からバンコクまでのフライト距離は約3.715 km。フライト時間は約5時間20分である。日本との時差はマイナス2時間。通貨はB（バーツ）で、1B≒2.98円（2005年12月）である。首都はタイのほぼ中央に位置するバンコク（タイ語名：クルンテープ・マハーナコーン英語名：Bangkok）。総人口は約6100万人<sup>12</sup>である。民族的には、タイ族が約85%、中華系が10%、他にモン・クメール系、マレー系、ラオス系、インド系が暮らしており、山岳部にはそれぞれの文化や言語をもった少数民族が暮らしている。公用語はタイ語。タイ語はシナ・チベット語に属する。大きな特徴の一つに音調がある。中国語の音調は4つだがタイ語には5つある。公用語はタイ語であるが北部や東北部に住む少数民族は、それぞれ独自の言葉を持っており、タイ語も通じないことが多い。

宗教に関しては、国民の9割以上が上座部（小乗）仏教を信仰しており、国教でもある。世界に冠たる仏教国である。学校では仏教の教えをもって倫理教育がなされ、素養としての仏教教育がある。仏教のほかはイスラム教、キリスト教、ヒンズー教、シーク教など。国教ではあるが、タイでは憲法で仏教の国教化を規定しおらず、信仰の自由は憲法が保障している。全人口の95%近くを仏教徒が占めているタイだが、タイで信仰されているのは日本の大乘仏教とは異なり、戒律が厳しいといわれる小乗仏教。別名上座部仏教と呼称される、かつて大乘仏教側から批判された南伝仏教である。小乗とは小さな乗り物を意味し、少数の者しか救えない教えとされた。選ばれし者のエリート主義的な仏教徒という位置づけである。寺院は全国に約3万あり、男子は一生に一度は仏門に入り修行するのが慣わしである。タイではどこへ行っても燦然と輝く寺院が目にとまり、早朝には黄衣をまとった僧侶に出会うことができる。僧侶は厳しい戒律のなかで修行をしており、社会的地位も高い。僧侶である期間中は厳しい戒律を守るが、還俗も自由である。タイの仏教徒は僧侶に施しをすることによってみずから徳を積み、積ませてもらったお礼にワイ（合掌）をする。戒律では僧侶が女性に触れることを禁じている。人ごみの中でも女性はできるだけ僧侶のそばに寄らないように心がけなければならない。バスや列車の車内で僧侶用の座席が区切られていることがあるが、これはこうした戒律によるものだ。生活に宗教の信仰があまり根付いていない私がタイのあちらこちらで目にした宗教色の強い生活様式にはたびたび驚かされた。しかし、熱心な信仰をささげるタイ人の姿に彼等の信仰の習慣を尊重し、しっか

---

<sup>12</sup> いい旅・街歩き編（2003）『いい旅・街歩き⑨タイ』 p.6 のデータより

り受け止めたいと思った。



《チャオプラヤー川から見た寺院》(2006.11.12 東)



《ワットアルンの船着場で》船から川に飛び込み遊ぶ少年達。(2006. 11.12 東)

同じアジアという地域に属していながらも、目にする光景は日本で生活する私のものとは全く違い、ギャップを感じるが多かった。コートやブーツ、マフラーはもちろんいらず年中半袖を着て過ごす一年を通して四季のない気候。毎日が台風かと思えるようなスコール。バンコクの象徴であり豊かな水をたたえ、穏やかに流れるチャオプラヤー川。黄金に光る仏教寺院。街中を歩く僧侶。タイという国には確かに豊かな自然と、常夏ゆえの熱気、昔から伝統的に受け継がれている信仰の強い人々の姿がある。

## 第2節 タイの歴史



《タイに咲いていた花》(2005. 11.12 東)

タイはインドシナと呼称される中国文明とインド文明のぶつかる地域に出来た国である。

東南アジアで唯一この植民地になることもなく、独自の文化と発展をとげてきたタイ王国は少なくとも 5000 年前には稲作を始めた世界最初の農耕民族といわれている。豊かな大地のもとに生まれた各王朝時代を経て、現在のタイ王国が少しずつ形作られていった。

現在のタイ国の地にいわゆるタイ族の国家が形成されたのは、13 世紀ごろのこと。先祖は紀元前、中国南部から次第にインドシナに移動。13 世紀以前は、モン人の国ドラバラディ、マレー人の国シュリービジャヤ、クメール人の国クメール(カンボジア)があった。ドラバラディはチャオプラヤー川下流域を中心に、ナコンパトムなどいくつもの堀で囲まれた都市を作っており、仏教を信仰する高度な文化圏が存在していたようだ。シュリービジャヤは、スマトラ島からマレー半島に至る地域で海上交易を行う大乘仏教を信仰する国で

あった。クメールは、カンボジアのアンコールを首都として、タイ東北部はもとより 13 世紀はじめにはタイ全土をも支配していた。13 世紀にスコータイ王朝、14 世紀にアユタヤ王朝が成立。1767 年ビルマの新興でアユタヤ王朝は滅びたが、1782 年に現チャクリ王朝が成立。第一次世界大戦と世界恐慌はタイにも深刻な不景気をもたらした。そんな中ラーマ7世が在位中の 1932 年、民主主義の理想に心酔したパリ在住の学生グループがシャム王国の絶対君主制に対してクーデターを起し、立憲君主制への道を切り拓いた。ラーマ7世は混乱を避けるために国外へ亡命。替わってラーマ8世が即位したが、1946 年、事故のために急逝。そしてラーマ8世の弟、現国王のプミポン・アドゥンヤデート殿下がラーマ9世として即位した。プミポン現国王が、名君の誉れ高いことは世界的にも有名で、今年（2005 年現時点）で即位 59 年を迎える。第 2 次世界大戦前から軍部クーデターが相次いだ。1973 年学生革命でタノム軍事政権を打倒したが、1976 年の“血の水曜日”事件を契機にクーデターが起こり議会民主制は崩壊。1977 年クーデター、1979 年総選挙実施・形式的民生移管、1980 年発足プレム内閣は民主化を推進している。

経済面ではたびたび起こるクーデターの中、1997 年 7 月タイ通貨が暴落するという事態に陥ってしまった。そこで破綻したタイ経済を取り戻すべく、1997 年 9 月には民主的な内容を盛り込んだ憲法改正が行われた。2001 年にはこの新憲法にのっとり行われた全国選挙で、タクシン・シナワットが総理大臣として選ばれ、今後の活動が注目されている。

タイは伝統的に柔軟な全方位外交を基本とし、ASEAN 加盟国として域内諸国との連携・強調を維持しつつ、日本、米国、中国といった地域に強い影響力を有する主要国との良好な関係の維持に努めてきた。

タクシン政権は、国益を最大化するための国際的な環境の整備に積極的に努め、アジア協力対話 (ACD) 及びアジア債券市場構想を提唱し、各国との FTA を推進している。また、隣接するカンボジア、ラオス、ミャンマーの貧困及びタイとの経済格差に起因する問題の解決のため、タイによる経済協力及び 4 カ国間での協力の枠組であるイラワジ・チャオプラヤー・メコン経済協力戦略 (ACMECS、2004 年 6 月にベトナムが参加) を提唱し、2004 年 11 月に閣僚会合を主催する等、近隣諸国との関係でも積極的なイニシアティブを打ち出しており、特にミャンマーとの関係を大幅に改善させた。

また、タイは 2003 年 10 月より 2004 年 9 月まで、イラク復興支援のため、工兵・医療部隊を中心にタイ軍約 450 名をイラクに派遣した。

タクシン政権は、従来の輸出主導に加えて国内需要も経済の牽引力とした持続的成長の確保を目指す一方、貧困撲滅と所得の拡大による国内経済の強化を目指している。具体的政策としては、一村一品政策、地方産業振興のための村落基金、農民債務モラトリアム、マイクロ・クレジットである国民銀行の設置等、ボトムアップ型の内需拡大、地方経済の強化及び貧困対策とともに、中小企業支援、金融システムの整備等による国内産業の強化と、海外投資の誘致による国際競争力の強化を打ち出している。またタクシン政権は貿易市場の拡大のため、各国との FTA を積極的に推進している。

タクシン政権の景気刺激策の奏功と見られる好調な内需と民間投資の拡大により、経済は回復基調に乗り、2003年には経済危機時の対IMF債務を返済し、SARSが観光業に影響を与えたものの、6.9%と経済危機後最高の経済成長率を記録した。成長へは個人消費、民間投資とともに、輸出の寄与も大きい。経済の拡大とともに輸入も伸びており、純輸出は2003年第4四半期以降マイナス。成長に対する懸念材料としては、原油価格や生産コストの上昇、鳥インフルエンザ等があげられている。

記憶にあたらしいタイにおける大きな出来事。今から1年前、2004年12月に発生したインド洋大津波。2004年、タイを訪れた際に交わした雑談を思い出すにはいられなかった。タイにおいて、『これまでに自然災害といえば、洪水が大きな問題であり、地震を経験したことが無い。でも、タイ人はなぜだかマンションにはあまり住みたがらないのよ。』と旅行会社でガイドをしている女性は私に笑顔で語った。まさか、タイであんなにも大きな地震が起きるとは思いもよらなかった。この地震、そして地震による津波はタイにおいて死者5,395名を数え（2005年3月14日時）、被害総額は300～350億バーツとされ、観光業、漁業等地域経済へ甚大な影響を与えているが、タイ経済全体への影響は限定的で、2004年は通年で6.1%成長を達成した。

2004年、初めて目にしたバンコクの姿は私の予想をはるかに上回る発展を遂げている最中であった。特に日本の渋谷・原宿あたりを思わせるサイアムスクエア周辺は高層ビルが立ち並ぶバンコクの大ショッピングエリアである。地元の若者をはじめ日本では考えられない世界各国から集まる大勢の観光客など、とにかくたくさんの人が溢れかえる。バンコクはタイの中心、先端の地でもあり、ファッションや映画・音楽などの文化にも非常に敏感なようだ。全て、日本の半値以下で楽しむことができるのも、魅力的である。しかし、バンコクは楽しい、華やかな街ばかりを見せてくれるわけではない。いたるところで、今発展を遂げているまさにその最中だと実感する。バンコクを歩いていると、発展を感じると共になんとも不思議な気持ちになる。高層ビルが立ち並び、更に、着々と新しい建物、ショッピングセンターが建てられている中、そのガラス張りのビルの横には空虚と化した建物が何も手を加えられずに存在する。日本であれば、すぐに壊す、建て直す、またはいったんは整備して駐車場などとして有効に使おうとするのではないだろうか。しかし、タイではいまだ空虚のビルが散々と存在する。この点から見る両国の姿はタイ人と日本人の性格を表しているかのように感じる。やると決めたら、すぐさま行動に移し、戦後急速な確実な発展を遂げた日本と、新しいものはもちろん取り込み、作るのであるがどこかゆっくり整備していこうとするタイ。

今現在のタイの首都バンコクの姿を目の当たりにすると、もはやタイは発展途上国とは称しがたい。しかし、急速な工業や経済の発展の背景にはタイがこれまで育んできた文化と歴史、タイ人の性格がはっきりと垣間見える。タイはこれからも、急速に、そしてどこかゆっくりと、タイならではのオリジナルな歴史が刻んでいくことだろう。

## 第3節 タイ人の名

### 1. タイ人の名の構成

タイ人の名には日本人の名との大きな違いがある。

日本の名は名字が先、名前が後であるが、タイでは名前が先、名字が後であるということである。タイにおいて、名を呼ぶときに、名字よりも名前を使う機会が多いのは、欧米の名の構成とタイの名の構成が同じであることを考えると自然なことのように感じる。

### 2. タイにおける名の管理

タイでは子供は生まれた病院を管轄する役所に必ず出生登録をする。この時に出生証明書をくれる。ここで登録されるのはもちろん、ニックネームではなく正式な名である。ちなみに、日本人とタイ人との間に生まれた子供はタイで生まれたらタイ風の名前を付けて登録しないとイケない。その後、日本語の名前を付けて日本のほうへ出生届を出すことも可能である。しかし逆はできない。日本で生まれたタイ人の子は日本の役所へ出した出生届をタイ語で書き写すだけだ。

タイにも日本でいう戸籍に近いものが存在する。タイ語でタビエン・バーンと呼ばれるものである。タイ語で「タビエン=登録」、「バーン=家」なので、英語では **HOUSE REGISTRATION** と訳す。このタビエン・バーンは身分証明書（タイ語でバット・プラチャーチョン）と合わせて色々な証明に使用される。例えば会社の取締役登記には、この両方の書類のコピーが要求される。会社の従業員も通常この二つの書類のコピーを提出するのが通常である。タビエン・バーンには何が書いてあるかという、この書類が人民登録法に基づくもので、公的な証明に使用されるものであることが記載されている。そして戸主は、この家で生まれた者、死亡した者、移転して来た者、移転する者を所定の期限内に届け出る義務があることが記載されている。まず家の番号、所在地、家の種類、状態などが記入され、最後に登記官の署名がある。それから、その家に入居している個人のことを記載されており、記載事項は氏名、国籍、性別、身分証明書番号、生年月日、どこから移転して来たか、どこへ移転したかなどが書き込むようになっている。ここで書かれる氏名とは、もちろんニックネームではなく、名と名字からなる本名である。

ここで、もう一度日本とタイの個人の管理のされ方の違いであるが、大きく違うのは、タイがとるタビエン・バーンというのは、簡単に言うと「登録制度」であるということ。「登録」といより、「告知」と言ったほうがしっくりくるかもしれない。日本の戸籍制度は「家」に入ることによって日本人であることを証明しようとするのに対し、タイの登録制度は1人1人がタイ人であることを証明し、その証明を各自で持って生きていくという日本人から見るとどこかユニークで、そのような管理のされ方で大丈夫なのかといささか不安な

ものである。しかし、ユニークなのは日本の方であり、戸籍制度を採っている国は、台湾・韓国・日本と世界では稀なのである。

### 3. タイ人の名字

タイの人々も、もちろん名字をそれぞれ持つ。しかし、名字というものは日常生活でほとんど呼ばれることはない。自己紹介でもまずフルネームは名乗らない。実際私がこれまで知り合ったタイ人も自己紹介の時には自分のニックネームを名乗り、こちらから尋ねない限り名字を名乗ることはなかった。よっぽどビジネスやフォーマルなシチュエーション以外、タイでは名字は登場しない。

日本人は職場では主に名字を使い仕事をこなす。身近な話題でいうと、私のアルバイト先での経験談がある。私はコーヒーショップでアルバイトをしている。アルバイト先では、普段同僚から“由佳梨ちゃん”と呼ばれている。しかし、一度お客さんを前にする現場へ出ると、とたんに私の呼び名は“東さん”に変わる。一度このことについてお店の店長と話をしたことがあるが、店長はお客さんを前に名字に“さん”や、“君”を付けることは常識だとはっきりと主張した。それはもちろん、プライベートとビジネスとをしっかりとわきまえる必要があると彼が考えているからであろう。私も、納得した。自分がお客さんの立場でも、従業員が名前や、よくわからないニックネームで呼び合いながら仕事をこなしているよりも、名字で呼び合うよう統一されたサービスを提供する現場の方が見ていて爽やかさに近いものを感じると思う。名字を使い仕事をこなすことに、呼ぶ方も呼ばれる方も気を使っているということになる。また、特に男女間では彼氏と彼女のような特別な異性関係ではないのだから、親しみをこめて呼んだりしてはいけない！という意見もあった。このとき交わされた何気ない会話はいかにも日本人のおかれるビジネス環境や性格を表しているなど今振り返るとしみじみ思う。

これに対し、タイのビジネスシチュエーションではどうかというと、同僚間ではもちろん、取引の相手方に対しても、日本のように“山田様”、“佐々木さん”ではなく、“クン・ソムチャイ”、“クン・ソムシー”のようにクン（～さん・様）を名（＝ファーストネーム）につけて呼び合う。そこから、信頼を勝ちとってうちとけた関係になると、ニックネーム呼びができるようになる。このように、タイではよっぽどのビジネスシチュエーション以外は、仕事でも名字を使うことはほとんどない。ちなみに、タイ人が外国人を話題にするときは基本的に名字で呼ぶが、名字だけではなく、フルネームで言うほうが多いようである。もちろん、人々にとっては名字が身近なものに代わりはないが、生活の現場ではとても影が薄いものなのである。付き合いが長い友達同士の間でも、ニックネームやかろうじて名前までは知っていても、名字は知らないということはめずらしいことではない。またタイ人は「あなたの名字は何？」と尋ねたりすることも少ない。毎日顔を合わせる友達や同僚の名字を生涯知らないということも全くめずらしいことではなく、決して失礼であ

るとか、名字を知らないからお互いの関係が希薄であると感じたりすることはないようである。では、なぜこんなにタイにおいて名字というものが軽視されているのだろうか。その背景にはタイが持つ歴史、そしてタイ人の気質が大きく関係している。

そもそも、一般のタイ人が名字を名乗るようになったのは 20 世紀の初め、1910 年（ラーマ 6 世王治世時）から。正確には、1913 年に名字令が発令されてからである。それまでのタイ族は貴族以外名字を持たなかった。日本の一般人が名字を名乗るようになったのは、明治 8 年、1875 年に発令された苗字必称令からであるのでタイは日本から 38 年後、半世紀近く遅れてから名字を持つようになったということになる。

それまでのタイでは、名字というものがなかった。つい最近まで名前だけでお互いを呼び合い、生活していたのである。それが突然、名字を持つように義務付けられた。人々は多少なり不慣れな感を抱いたに違いない。名字を持つようになっていまだ 100 年もたっていないタイ。名前だけを呼ぶ習慣が長く続き、名字をもつのが遅かったという歴史は、タイ人がいまだ名字を名乗ったり、呼んだりしない生活に深く関係しているのではないだろうか。

二つ目の理由として、タイ人の名字の長さが挙げられる。1913 年、名字令が発令された際、タイ人の名字は僧侶が名付け親になるケースが多かったようである。もっとも、僧侶がつけるばかりではなく、様々な由来はある。僧侶がつけるほかには王様から頂いたもの、地名からとったものもあるようだ。名字には縁起のいい言葉や吉祥名が多く使われた。どうせ名字をもつなら、少し格好のいいものが良い。そこで、タイ人は各々自分の名字にかっこいい意味をもたせようと努めたようである。その結果、タイ人の名字はあらゆる意味を含んだ数単語から構成され、名字が名前よりも長くなる傾向になっていった。異様に長いのである。長いのが故に法律で許されているのは最大十音節までであり、規定がある。一般にタイ人は長い固有名詞を口にするのを避ける傾向がある。役所名・団体名などはイニシャルを組み合わせた略称がよく使われる。この傾向は日本人、特に若者にもよくうかがえることだが、長いものは省略して、より簡潔さを求めるようになる。もしくは、ややこしいものは避け、他に区別できるものを持ち合わせているのであれば、そちらを優先的に使う。その方が有効なのである。

ちなみに、日本では結婚をすると夫の名字に合わせて妻になる女性は名字が変わることが一般的だが、タイではどうかというと、以前は結婚により夫の名字を名乗ることが義務付けられていたが、2004 年にタイの憲法裁判所から「夫の姓を名乗るとする条項は違憲である」違憲判決がなされた。しかし、元々名字の社会的重要性が薄く、かつ関心も低いことからあまり認知されてはいない。その後 2005 年に個人名法の改正は行われていないが、「男性の姓を名乗る」、「女性の姓を名乗る」、「新たに名字を作成する」の方法が認められている<sup>13</sup>。私のタイ人の友人の両親は「新たに名字を作成する」方法をとったと話していた。

---

<sup>13</sup> インターネット フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/>



好きな言葉を組み合わせ、とてもロマンチックな名字だった。タイでは、日本では考えられない選択肢、そして名字に対してとても自由な価値観を持っている。

今まで持っていなかった名字。そして持つことになった名字の長さ、意味の抽象的さ。長い固有名詞を避け、ややこしさを嫌うタイ人の性格。タイ人が名字にまだ親しみもがもてず、日常生活に浸透しない現状はこのようなどころにあるのだ。

#### 4. タイ人の名前

タイ人の名前は日本の場合と同じように、子供が生まれたときに、子供の幸せや健康を祈り、いろいろな意味をこめてつけられる。名前を付けるときは国王の名前と類似したもの、意味のない単語、10音節以上を持つ語などを用いる以外、自由に名前を付けることが許されている。昔は、子供が生まれると近所のお寺に行って僧侶に名前をつけてもらっていたようだが、現在では両親が名前をつけるのが一般的なようである。日本のように年ごとに名前の流行はないようだが、人気のある名前、よく使われる名前はあるようである。

男性の場合、一般にタイ人男性の名前で一番多い名前は「ソム・チャーイ」だといわれている。「ソム」は適した、満足する、似合うなどの意味がある言葉。「チャーイ」はおとことという意味の言葉であるから、意味としては男らしい、男を満足しているというような意味の名前になる。日本風に言うと、「満男」、または「良男」というところだろうか。

女性の場合でも、男性と同じように「ソム」という言葉を使う名前は多いようだ。たとえば、「ソム・シー」、「ソム・イン」など。これも、日本風に直すと、「満子」、「良子」というところだ。他に、「ラット」という言葉を使う名前も多いようだ。ラットとは、仏教の用語で「仏教の世界で最も大切な三つの宝」を表す。三つの宝というのは、ブッダ、経典、僧侶で最も勝ちのあるものを指す言葉として使われる。この言葉を使った女性名では「ウライ・ラット」というのがある。「ウライ」とは「黄金」という意味である。すなわち、「ウライ・ラット」という名は「最高の黄金」という意味になる。また、女性の名前では、響きが美しい言葉を名前に用いる場合もある。

こうしてみると、タイ人の名前もいろいろな意味を含んでいるということがはっきりとわかる。タイ語も二つの単語を組み合わせる新しい意味の言葉を作り、名としており日本人の名前の付け方と似ているところがある。しかし、この世に生まれ、初めて与えられる贈り物である名前も、タイにおいてはほとんど使われることはない。なんだかせつかく付けてもらったものなのに、もったいないような気がするが。

## 第4節 タイにおけるニックネーム

### －アンケートからみるタイにおけるニックネーム文化の実態

この章の冒頭にも書いたが、私はもともと人間のもつ名には興味があったが、バンコクの地を踏むまで、タイ人がニックネームをもつという文化を知らなかった。2004年8月23日。その日は私がタイを訪れる目的であったタイ国際航空における研修の初日であった。タイ国際航空は1959年12月の設立以来、アジアをはじめオーストラリア、ヨーロッパ、中東、北米へとルートを広げ、現在バンコクを基点として34カ国73都市を結ぶタイのナショナルフラッグキャリアである。タイ国際航空のサービスには、“ランド・オブ・スマイル微笑の国”と呼ばれるタイランドの人々が伝統的に持つ暖かいもてなしの心があふれて生かされている。私は、幼い頃から将来サービス業に就きたいと志していたため、大学3年次の夏、大学の教授から紹介いただいたインターンシップに参加を希望した。そのインターンシップ先の企業先がタイ国際航空だった。憧れの職業に少しでも触れることができるのを私は心待ちにしていた。そして、いよいよタイ航空の人と対面することになったのがこの8月23日であった。タイ航空の本社の一室、簡単な会社紹介の後、6名の男性インストラクターの方々の自己紹介にうつった。そこで私は一瞬耳を疑うような光景を目の当たりにした。タイ人のインストラクターはそれぞれ冗談？ともとれるような名を次々に名乗った。この瞬間こそが、私とタイのニックネーム文化との出会いであった。

日本で通常交わされるような自己紹介ではなかったため、キョトンとした表情の私たちを察して、インストラクターの方から「私たちが名乗ったのは、それぞれニックネームです。」という説明があった。一人の男性のニックネームは“PUMP=ポンプ”であった。なぜポンプというニックネームを持つようになったのか。彼は続けて話してくれた。ポンプさんが生まれた家の近くにはガソリンスタンドがあり、そこにあったポンプを目にしたポンプさんの両親が彼にポンプというニックネームをつけたのだそうだ。つまり、彼が生涯一番身近に持つことになる名はガソリンポンプからつけられたのである。人間の名前がガソリンポンプからつけられるとは……。衝撃的だった。他にも、“POO=プー”さん、“WUT=ワット”さんと、子供でも、学生でもない大人達が、仕事場でそれぞれお互いのことをニックネームで呼び合い会話が成立している。立派なオフィスの一室で繰り広げられるその光景がなんとも不思議に感じたが、微笑みの国といわれるようなホスピタリティに富んだタイの人達が笑顔でニックネームを用いてお互いを呼び合う姿をだんだんほほえましく感じるようになった。私はすぐにこのニックネーム文化に興味を抱き、実態を知りたいと思うようになっていたのだ。

日本に戻り、タイに関する本を読んだり、長崎大学に留学生として勉強にきているタイ人と交流したりすることで、少しずつこの不思議なニックネーム文化についての知識や理解を増やすことを心がけた。まず、このニックネームのことをタイでは“チューレン”<sup>14</sup>と

<sup>14</sup> タイ語で「チュー=名前」、「レン=遊び」の意。

ということがわかった。そしてやはり、タイに関する文書や、タイの友人から聞く話から多くのタイ人は本名の姓名のほかにチューレンを持ち、タイ社会ではチューレンで呼び合うのが当たりまえだということがわかってきた。チューレンに関する話を聞けば聞くほど、もう一度、タイへ行きタイ文化に、そしてチューレンの現地での実態をつかみたいと強く思うようになった。

2005年11月9日から14日までの4泊6日。念願かなって私はもう一度バンコクへ向け日本をたった。2度目のタイは相変わらずアジア色の強いエネルギッシュな雰囲気に満ちていた。2004年と同様、微笑みの国と称されるタイの人々は私を笑顔で迎えてくれた。

## 1. アンケートの調査の目的と概要

2005年、タイを訪れた目的はチューレンの現地調査だった。チューレンがどのようにタイ人の間で通用していて認識されているのかを知りたかった。より多くのタイ人のチューレン事情を知りたかったので、私は現地でタイ人に対しアンケートをとりたいと考えた。今回アンケートには、2004年夏から2005年9月まで長崎大学の教育学部で国際関係の勉強を目的にタイから留学していた Kammasit Wichitphan さん、(彼のチューレンは“チョル”なので、以下、Kammasit さんのことをチョルさんと称させてもらう) 2004年インターンシップでバンコクを訪れた際お世話いただいたタイの旅行会社、SMI トラベルカンパニーリミテッドの加藤英氏に協力いただいた。お二人にはタイの文化、現状を知る際にアドバイスいただいたことはもちろん、タイ語はおろか、英語さえろくにできない私には力強い見方であり、今回現地の人々にアンケートをとらせていただくことができたのは本当に彼等のおかげだと思うので感謝の気持ちでいっぱいである。

2005年11月10日と11日の二日間、私は Mahidol University International College、SMI トラベルカンパニーリミテッドの本社を訪れた。

11月10日。タイに到着した翌日、私が向かったのが Mahidol (マヒドン) 大学だ。1943年に創立され、50年以上の歴史を持つマヒドン大学は、14の学部と研究機関で構成され、13,000人の学生が在籍している<sup>15</sup>。タイでは最大級の国立総合大学だ。メインキャンパスは、チャオプラヤー川の西岸、バンコク近郊バンプラッド地区にあり、もう一つのキャンパスは、バンコクの西方、ナコンパトムにある。今回私が訪れたのは市内から約20キロ離れたサラヤという所のキャンパス。バンコク



《マヒドン大学外観》(2005.11.10 東)

バンコク

<sup>15</sup> スタディインタイランドホームページより <http://studyinthailand.com/>

ほどの道のりであった。比較的最近に設置されたキャンパスで、広大な土地のあちこちで新設の学部・学科や研究所の建物、学生寮、職員の宿舎などが次々と建設されているという、活気に満ちた所であった。今回マヒドン大学を訪れることはもちろん、異国で大学に足を踏み入れること自体初めてであった私はマヒドン大学に着いてそのたたずまい、そして雰囲気に緊張を隠せなかった。大学でチョルさんと落ちあい、一步足を踏み入れ案内してもらおうと、そこには日本の学生と変わらないタイの学生生活が見られ、ちょっとホッとしました。



《マヒドン大学構内》 広々と開放的な雰囲気  
(2005.11.10 東)



《マヒドン大学にて》 マイカーで通学している学生が多いようだ (2005.11.10 東)



《マヒドン大学内の掲示物》 校則に関するもの (2005.11.10 東)



《大学内のカフェ》 スタッフが妙に多い。  
(2005.11.10 東)

日本の大学生とタイの大学生の大きな違いは、タイの大学生は、制服を着ているということだ。男子学生の場合、白いシャツと黒か青の長ズボン、女子学生の場合、白いシャツと黒か青のスカートという具合である。スカートは日本の女子中学生や高校生が身につけるようなプリーツ型ではなく、タイトスカートが主流のようだ。制服はあるが、髪形や靴に関しては自由が許されているようであり、茶髪の学生、ネックレスやピアスを身につけ、ファッションに敏感な学生もたくさん見受けられた。大学内には学生が集うピロティヤ、

カフェがあり、ちょうど午後の講義を終えた学生達が思い思いの放課後を楽しんでいた。私はチョルさんと共に、アンケートの協力を呼びかけた。マヒドン大学の学生達は快くアンケートに協力してくださり、私が日本から一人でやってきた旨を伝えると、少し驚きの表情を見せ、そして多くの学生が「ようこそ」と暖かい言葉をかけてくれた。ここでも、私は微笑みの国、タイの姿に触れることができ、とても嬉しく思った。

翌日 11 月 11 日。幸運にも、私はバンコクの大企業の一つである SMI トラベルカンパニーリミテッド（以下 SMI）を訪れる機会を頂いた。SMI は 1980 年 9 月 1 日に創立された旅行会社である。現在日本人スタッフ 17 名、タイ人スタッフ 75 名、タイ人ガイド 112 名が在籍している<sup>16</sup>。本社は BTS のナショナル・スタジアム駅<sup>17</sup>から徒歩 3 分といったところだろうか。バンコク的一大ショッピングエリアであるラマー世通りに位置する。大きく、綺麗なビルの 14 階のフロアに構えるオフィスではタイ語も飛び交えば、日本人スタッフの間では日本語が使われる。なんともグローバルなオフィスであった。日本から突然訪問した一学生である私に、すぐに日本人の女性スタッフが「私のチューレンは“オウ”ですよ。」と笑顔で声をかけてくれた。タイ人スタッフもみなさん仕事を抱え、忙しそうにオフィス内を行き来する中、私のアンケートに快く協力してくれた。

もう一つのツールとして、私と同じ長崎大学教育学部情報文化教育課程クロスカルチャー



《アンケートに協力してくれた学生》（2005.11.11 東）



《アンケートに協力してくれた学生》ピロティにて（2005.11.11 東）

コースに所属する早川美由紀さんの協力で Chiang Mai University の学生 50 名にも同じようにチューレンに関するアンケート調査を実施できた。チェンマイ大学は、バンコク以外に設立された最初の大学である。1964 年の創立以来、教育、研究、文化育成、地域サービスの 4 つの活動を行い、特にタイ北部地方のニーズを重視し、また国際協力にも積極的で、海外の多くの大学機関と提携している。タイに関する研究を目的に 2005 年 11 月 6 日から私よりも 3 日早く日本をたちチェンマイを訪れていた早川さんに協力を願い、実現した調査である。バンコクという都市に限らず、チェンマイにおけるチューレンの実態も調査できたのは本当に幸運なことで、早川さんにも心から感謝したい。

<sup>16</sup> 2005 年、加藤氏からいただいたデータである。

<sup>17</sup> B T S スクンヴィット線の終着駅。

### The questionnaire about your nickname

I am a Japanese college student.

I am interested in the culture of Thailand, especially the nickname culture of Thailand.

I do not use this questionnaire for any purposes other than research. Please give me cooperation.

If you are possible, please write in English.

Nagasaki University

Yukari Higashi

Q1. Do you have nickname?

Yes / No

Q2. What's your nickname?

( )

Q3. What's the origin of your nickname?

①Living thing ② An alphabet ③Christian name

④Physical adjective ⑤ Your real name ⑥Other( )

Q4. What does your nickname mean?

( )

Q5. Do you love your nickname?

Yes / No

Q6. Do you want to change your nickname?

Yes / No

 Why? ( )

Q7. When is it that you came to be called by your nickname?

①When you are born ② Elementary school

③Junior high school student ④High school student ⑤ Recently

Q8. Who gave your nickname?

①Your parents ② Priest ③ Your friends ④Other( )

Q9. Do you have nickname other than the main nickname?

Yes / No

Q10. By which name are you called more?

Real name / Nickname

Q11. When are you called by your real name?

( )

Q12. When are you called by your main nickname?

( )

Q13. When are you called by your other nickname?

( )

Q14. By which name do you want to be called?

Real name / Nickname

Q15. Almost all Thai people have nickname.

Did you know that this is a culture unique to Thailand?

Yes / No

Q16. What do you think about this nickname culture?

- ① I am proud of it. It is one of the culture to be maintained in the future.
- ② Since it is puzzling, I think that it is unnecessary.
- ③ I consider nothing special about it.

アンケート用紙 (チェンマイ大学用)

### The questionnaire about your nickname

I am a Japanese college student. I am interested in the culture of Thailand, especially the nickname culture of Thailand. I do not use this questionnaire for any purposes other than research. Please give me cooperation. If you are possible, please write in English.

Nagasaki University

Yukari Higashi

**Q1. Do you have nickname?**

Yes / No

**Q2. What's your nickname?**

( )

**Q3. What's the origin of your nickname?**

- ① Living thing ② An alphabet ③ Christian name  
④ Physical adjective ⑤ Your real name ⑥ Other( )

**Q4. Do you love your nickname?**

Yes / No

**Q5. Who gave your nickname?**

- ① Your parents ② Priest ③ Your friends ④ Other( )

**Q6. Almost all Thai people have nickname.**



**Did you know that this is a culture unique to Thailand?**

Yes / No

**Q 7. What do you think about this nickname culture?**

- ① I am proud of it. It is one of the culture to be maintained
- ② Since it is puzzling, I think that it is unnecessary.
- ③ I consider nothing special about it.

b. 対象（回答数）：Mahidol University International College 学生 60 名

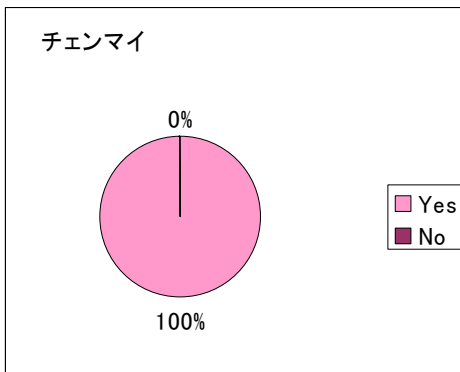
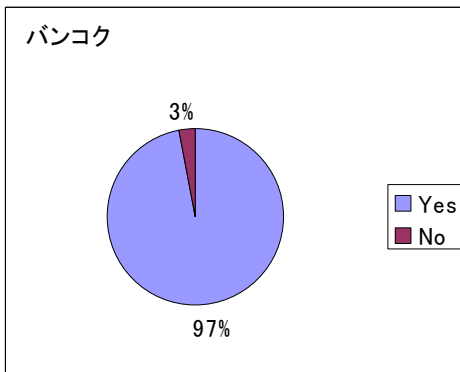
SMI トラベルカンパニーリミテッド タイ人スタッフ 44 名

Chiang Mai University 学生 50 名

計 154 名

**2. アンケート調査結果**

〔Q1〕 Do you have nickname? / あなたはニックネームを持っていますか？



グラフから、タイにおいて、どれほどニックネーム＝チューレンが通用しているのかがわかる。

私が生きる日本社会にはもちろん存在しない事実であり、いよいよタイの独特の文化が浮き彫りになった。タイはバンコクにおいての 3%の「No」という回答もあるが、ほとんどの人間がニックネームを持つ国なのである。また、この問いに関しては、バンコクとチェンマイ、二つの都市で同じ問いを投げかけたものでもあるが、二つの都市でそれぞれ大きな差はなく、むしろチェンマイでは 100%「Yes」の答えが得られた。この結果からニックネームをもつという文化は発展が目覚しく、グローバル化が進む首都バンコクに限ったものではないということははっきりとわかった。タイ北部に位置し、山岳少数民族も多く、文化的にも多様な流れが今も色濃いチェンマイにおいてもニックネーム文化は存在した。チェンマイよりもさらに北に位置するチェンライ

出身のタイ人の友人もチューレンを持っていたので、ニックネーム文化はチェンマイを始めとするタイの地方にも確実に存在し、浸透している文化であることがうかがえる。



〔Q2〕 What's your nickname? / あなたのニックネームは何ですか？

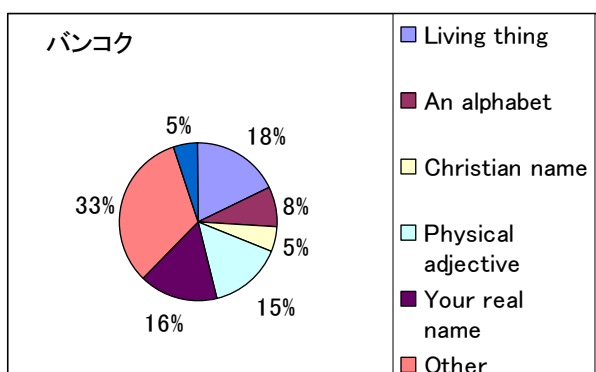
回答例

ニックネーム	読み方
KOB	カブ
POP	ポップ
PLE	プル
fon	フォン
Vee	ヴィー

この問いに対しては 104 名、十人十色であった。もちろん、日本であなたの名前は何ですか？と聞いても、100 人にとれば 100 人それぞれの名前が回答として得られるはずで、この多様さは特にタイに限ったことではないだろう。この問いもバンコクとチェンマイ二つの都市を対象にし、それぞれ回答を得たが、土地による偏りはなく、タイ人のチューレンにおいて、特に多いチューレン

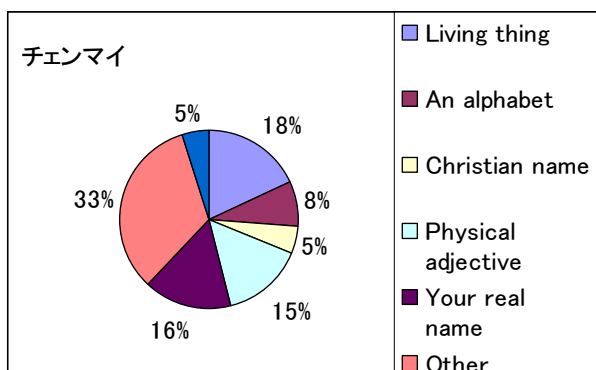
が目立つことはなかった。その中で二人のタイ人からの回答としてあったのが、“Poo” というチューレンであった。おそらく、呼びやすさ、響きの可愛らしさが人気の要因であろう。事前にタイ人から聞いた話によると、日本でも考えられる現象であるように、タイでも時代の流れでポピュラーなチューレンが存在するようである。どのチューレンをとっても大体が 1～2 音節程度で呼びやすく、また響きもどこか可愛いものが多い傾向にあるようだ。

〔Q3〕 What's the origin of your nickname? / あなたのニックネームの由来は何ですか？



あらかじめ、タイ人のチューレンが何に由来することが多いのか情報をつかみ、選択肢を 5 つあげることにした。この 5 つの選択肢内で約 60%の回答が得られ、チューレンを着ける際イメージするものが見えてくる。

バンコク、チェンマイ、それぞれのパーセンテージを比較してみると、大きな違いはここでも見られることはなく、チューレンをつける際、頭に思い浮かべ、由来とするものはどうやら全国共通のようである。では、実際どのような意味を持つチューレンをタイ人は持っているのか。詳しくは次の〔Q4〕を参照していただきたい。



〔Q4〕 What does your nickname mean? / あなたのニックネームが意味するものは何ですか？

回答例

ニックネーム	読み方	意味
POO	プー	カニ
KOB	カブ	蛙
POP	ポップ	pop music より
PLE	プル	りんご (apple)
Fon	フォン	雨
Vee	ヴィー	V(アルファベット)

〔Q1〕でニックネームをたずねた際、104人いれば、104通りあったように、チューレンが意味するものも104人いれば、104通りあるということになる。〔Q3〕を掘り下げた問いになるが、〔Q3〕で一番多い回答であった「Living thing=生き物」も、多種多様であって、左グラフに挙げた例のように、“Poo=かに”というチュー

レンの人もいれば、ロブスターの人もいる。

“Vee”さんのように、アルファベットの“V”からとった人もいる。アルファベットからの由来といっても、本名のアルファベットからとったものとは限らず、好きな響きのアルファベットなどからとって付けられたものが多いようだ。

“Nick”、“Jack”のように、西洋人の名の響きを真似てつけられたものもある。近代革命によってグローバル化が進み、タイには、年間800万人以上の観光客が訪れる。この数字は日本を訪れる外国人観光客数のおよそ2倍である。西洋の文化も次々と入ってくる中、タイ人の間で、外国語の名前が格好良いとされる意識が芽生えたことが関係しているようだ。

身体的形容詞も、タイ人はチューレンにしてしまう。たとえば、生まれたとき、とても小さい赤ちゃんだった人は“Kab=小さい”、逆に大きければ“Berm=大きい”といったような感じである。このようにその人の容姿を表す形容詞を基にチューレンをつけられた人は104人中15人の回答があり、10人に一人の割合でいるようだ。

もちろん、日本人がニックネームをつける際最もポピュラーな由来である、本名に基づいたチューレンもある。本名がNatchaponという人が“Natch”→“Nash”となり、最終的に“Nash”というチューレンを持つにいたった人の例もある。この感覚は私達日本人でも理解できる範囲ではないだろうか。

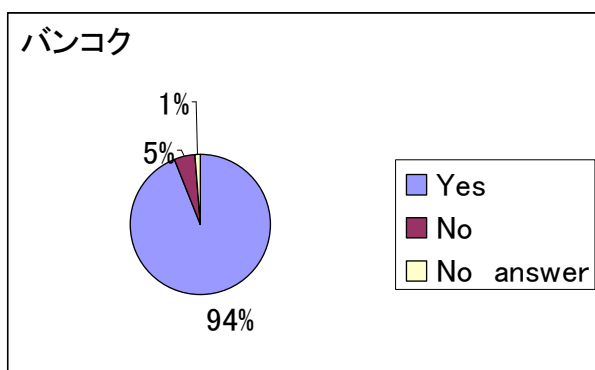
その他の回答で目立ったのは“Ple=りんご”（これはりんごの英語であるappleの語尾からとったもののようなものである。）、“Peach=桃”さんのように、フルーツを意味するチューレンである。このようなフルーツを由来とするチューレンは南国タイならではものだ。興味深いものでは、アニメ、「ルパン三世」より、Lu-Pangと音節を分け、そのうち、後者の“Pang”をとりチューレンとしている人、時計の針の音から“Tick”というチューレンを持つ人もいた。ここまで見ると、タイ人のチューレンは何でもありのように見えるが、中には、チューレンとして用いない語もある。たとえば動物の中でも、水牛というのはあり

得ない。タイ語では水牛は愚かさの象徴であるからだ。タイにおいて、「あいつは水牛のように間抜けだ」という比喩表現が用いられると、かなり攻撃的な意味合いを持つ。

タイ人のチューレンには本当に様々な由来があるが、その中で私が一番記憶に残ったチューレンの由来の話は、今回アンケート調査に協力いただき、私の友人でもある Chol さんのチューレン誕生秘話である。Chol (Chol) とはタイ語で水を意味する。Chol さんは、日本語に訳すと水さんなのだが、なぜ彼が水を意味するチューレンを名付けられたのか。私は彼に尋ねた。答えは Chol さんの本名と、タイ人に根付く信仰心、そして彼が生まれた年、1983 年という生年月日にあった。Chol さんの本名は **Kammasit** といい、この本名はタイで「地」「火」「風」「空」「水」のいわゆる五大要素のうち、「水」以外の4つの意味を含んでいる。この本名にチューレンで「水」を意味する “Chol” をプラスすることで、世を構成する重要なもののバランスが完成することを考え、彼の両親が、Chol さんが生まれ、名をつける際に一緒に与えてくれたものだというものだった。タイ人はこの五大要素のバランスをととても重要視しているのだという。そして、もう一つ、「水」と関連するのが 1983 年、彼が生まれた年に起こった記録的な大洪水だ。タイでは、連日のスコールで洪水が起こることは日常茶飯事だが、1983 年に起こった洪水は特別に大きなものだったのだそうだ。彼の両親はこの記録的な自然災害の追悼の意も含ませ、彼に水を意味する Chol というチューレンを与えた。このように、生まれた年に話題になった出来事、人物にちなんだ名がつけられることは日本の名付けの際にもよくみられることであるが、タイでも同じように名付けの重要なヒントとなっているようだ。Chol さんのチューレンの由来はどれをとってもとても奥が深いもので、これだけいろんな思いをこめられてつけられた Chol というチューレンはとても意味のあるものであり、Chol さんはとても幸せ者だなと思った。

タイ航空のインストラクター、Pom さんのように生まれたときに偶然目にしたガソリンポンプ、近代化に伴いつけられた西洋人風の名、身近な生物や植物、そして、Chol さんのようにたくさんの意味を含んだチューレン。どんなチューレンにも、由来があり、そしてその由来を知る人もいれば、自分のチューレンの由来を知らずに一生使い続けるタイ人の姿もある。日本人の耳には納得できず、不思議に思う由来やタイ人の姿があるかもしれないが、これがタイの考え方、タイのチューレンの実態なのである。

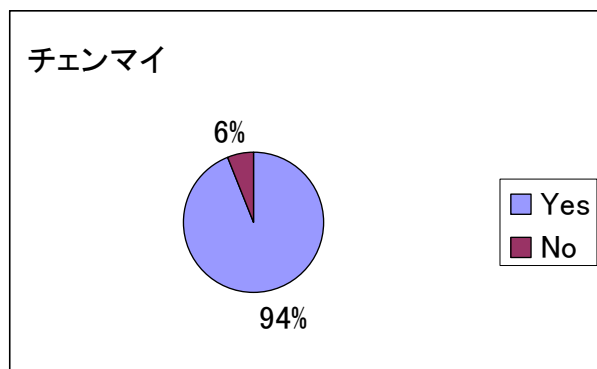
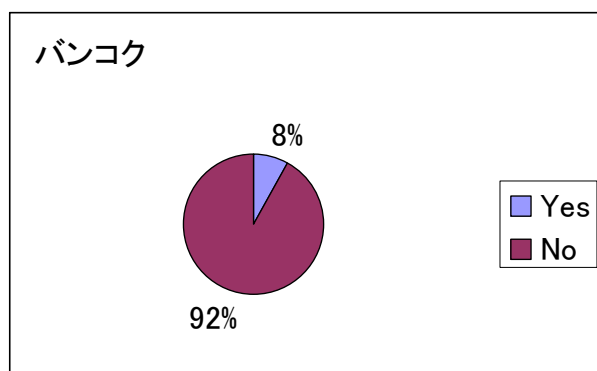
[Q5] Do you love your nickname? / あなたはあなたのニックネームが好きですか？



多くのタイ人が自分のチューレンに対し、深い愛着心を持ち、誇りにしているようだ。チューレンの中には “Moo=豚”、“Men=臭い” といった日本では下手したら陰湿なイジメ用語になってしまうの

ではないかと心配になるようなものもある。特に、“Moo”は響きも可愛く、呼びやすいことから、タイではポピュラーなチューレンの一つのようだが、“Moo”を日本語にすると、“豚”であり、日常の中で、「こんにちは、豚さん。」「テストの結果はどうだった？豚さん」といったような会話が交わされるのである。日本人が、“豚”呼ばわりされると決していい気分ではいられないだろうが、タイ人は一向に気にしておらず、「私は豚です、よろしく！」といったような自己紹介を笑顔と共に向けてくれる。あっけらかんと愛嬌たっぷりに。どんな意味であろうと、タイ人は自分のチューレンに対し、誇りと愛着心をもっているのである。

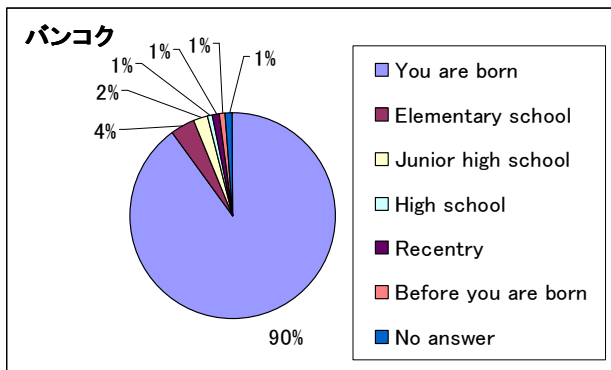
〔Q6〕 Do you want to change your nickname? / あなたはあなたのニックネームを変えたいですか？



〔Q5〕からの回答結果からも十分に伺えるが、多くのタイ人が自分のチューレンにして、誇りや、愛着心をもっている。「両親が自分に与えてくれたものであるから」、「自分にふさわしいものだと思う」など本当に心から自分のチューレンに愛着をもっていることがうかがえた。“豚=Moo”、“臭い=Meng”といったチューレンを持つ人も、この問いに対し、ニックネームを変えたいとの回答はしていなかった。一生呼ばれる名が豚であったら私だったらたまらないだろう。いくら名付け親が試行錯誤の末につけてくれたニックネームであっても、誇りをもつどころか、改名を願い出ることだって否めない。

「Yes」と答えた人が、なぜ「Yes」と答えたのか、中には、「古臭いから」、「ありきたりなニックネームだから」、具体的に「“Luzy”というチューレンがよかった」などという理由が挙げられていた。決して、自分の名前が持つ意味にこだわることはなく、響きなど、新しい視点からの意見が目立つ。ここが、タイ人と日本人の性格の違いなのだ。チューレンはあくまで本名以外の名前、ニックネームであるため、もちろん、法律や戸籍に管理されているわけではない。従って変えることは本人の意思の自由なのであるが、それでも、多くのタイ人は生まれたときに与えられたチューレン、長年使っているチューレンに対し、深い愛情をもち、生涯付き合っていく覚悟を自然と持ち合わせ使用しているのである。

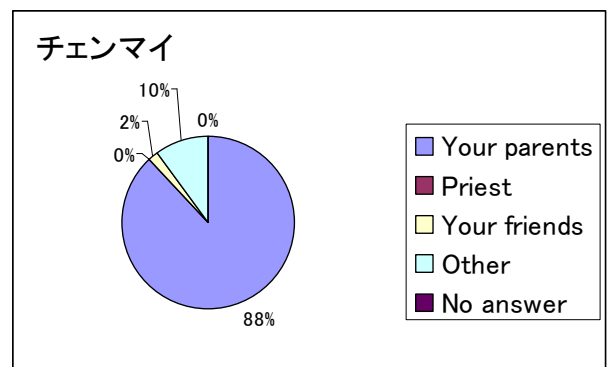
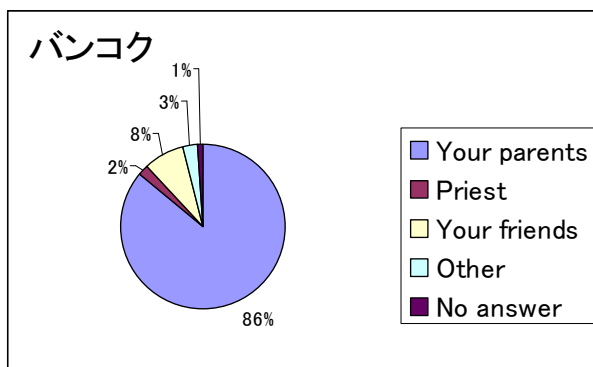
〔Q7〕 When is it that you came to be called by your nickname? / あなたはいつからニックネームで呼ばれていますか？



本来チューレンはタイにおいて、子供が生まれた際、病気や悪い霊から守るために、わざと変な名前や汚い意味を持つ名前をつけると考えられている。これは仏教とアニミズムを信仰するタイならではの宗教文化によるものである。アニミズムとは、宗教の原初的な超自然観の一つで、自然界のあらゆる

事物は具体的な現象をもつと同時に、それぞれ固有の靈魂や精霊などの霊的存在を有するとみなし、諸現象はその意思や働きによるものと見なす信仰のことである。このアニミズムはタイ人の間に仏教の信仰と共に広く見られる信仰であり、タイにおいては、一般的には人間の精神生活・身体に悪影響を及ぼすと考えられる超自然的な霊の概念をピーと総称する。ピー（精霊）は美しいものに引かれると信じられていて、生後 30 日以内に本名で子供の名を呼ぶと、精霊たちがその子に感心を持ち、精霊が不幸を運んでくるといわれている。この質問に対し 9 割の人が生まれるときにチューレンを与えられたと回答があるのはこのような精霊信仰が背景にあるためだ。“豚”や“臭い”といったような常識では考えられないようなチューレンをつけられるのも、このピーが「変だ」、「汚い」、と思い子供から遠ざかっていくことを願った名付け側の配慮なのであった。

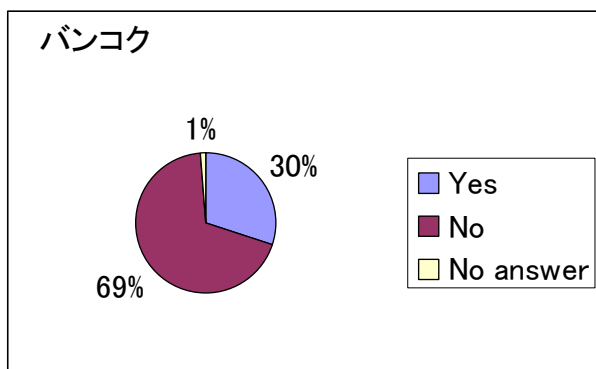
〔Q8〕 Who gave your nickname? / あなたにニックネームをつけたのは誰ですか？



誰がチューレンを考え、与えているのか。答えは、日本と変わらず、やはり直接の両親であることがわかる。これは、バンコク、チェンマイ間に大きな違いが見られることは無く、タイにおいて、10人に約9人は両親が本名の名、チューレンの名付け親であるようだ。

前回タイを訪れた際、タイ人が仏教を信仰する姿を全面に感じたので、アンケートの選択肢に「Priest=僧」を挙げてみたが、結果、現代のタイにおいてはチューレンを僧がつけることはほとんどないようである。その他の名付け親としては、兄弟や叔母、叔父、祖父母などの親族だという回答がちらほらあった。名付け親に関しての現状は日本とさほど変わらないようだ。

〔Q9〕 Do you have nickname other than the main nickname? / あなたはメインニックネームの他にもニックネームがありますか？



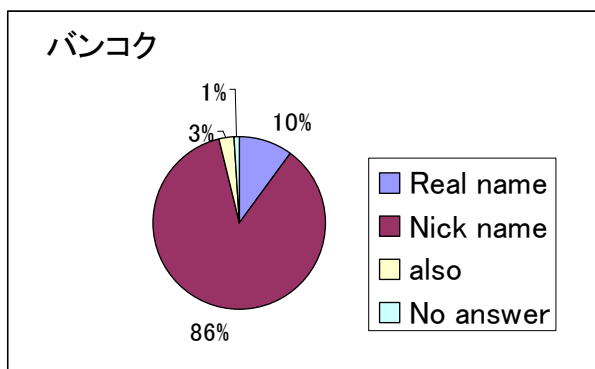
私がこの問いを挙げようと考えたのは、タイ人の友人である、ネームとの会話からである。ネームはチェンマイ大学に通う学生で、 Cholさんと同様 2004 年から長崎大学に経済学を勉強に留学生としてきていた。23 歳の女の子である。ネームには、本名の名前と、“Name=ネーム”という生まれたときに、両親から付けら

れたチューレンがあるのだが、彼女にはもう一つ、チューレンがあったのだ。

ネームと話をしていると、ネームの携帯電話が鳴った。相手はネームのボーイフレンドだった。彼は、ネームと同じ、チェンマイの大学に通う学生でタイから国際電話でネームに電話をかけていた。ネームはとても楽しそうに会話をしていた。傍で彼女たちの話を聞いていて、ネームが彼のことを“ムーム”と呼んでいることが伺えた。電話の後、ネームに「彼のチューレンは“ムーム”なんだね。」と聞くと、彼女は笑って、「彼のことを“ムーム”と呼んでいるのは私だけよ。」と答えた。聞くと、彼も、ネームのことを“ムーム”と呼ぶらしい。“ムーム”とはたびたび述べているが、タイ語における豚のことである。彼女達は、お互いの事を本来のチューレンを無視して、“豚豚”、“豚”と呼び合っているのだ。それってどうなのだろうか・・・と私は思い、不思議そうな表情を浮かべていると、ネームは「彼はガッチリした体型で、ちょっとふっくらしています。“ムーム”一匹では足りない！」と笑って見せた。どうやら、“ムーム”は彼の体型を表すのに一匹の豚では足りず、二匹の豚ということの意味しているらしい。恋人関係にある二人の間だけで交わされるなんとも微笑ましいチューレン事情だな、と思った。チューレンは一つしかもってはいけないという制限は無く、第2、第3のチューレンを持つことも自由なのである。今回のアンケートの結果からも、約3割のタイ人が、第2、第3のチューレンを持っているという

ことがわかる。では、どのような場でこの第2、第3のチューレンは使われているのか、詳しくは〔Q13〕を参照していただきたい。

〔Q10〕 By which name are you called more? / あなたはどちら（本名・ニックネーム）でよく呼ばれますか？



この結果を見ると、いかにニックネーム文化がタイの社会に深く根付いているかというかがよくわかる。前にも述べたが、友達の本名を知らないとうことはめずらしいことではないので、もはや、どちらで呼ぶかという問題の前に、チューレンしか知らないので、チューレンで呼ぶ、呼ばれるほかないというのが現状で

あるのかもしれない。

〔Q11〕 When are you called by your real name? / あなたが本名で呼ばれるのはどんな場ですか？

多くの回答用紙に、「official」という語が見られた。具体的には、学生の場合は、「大学の教授が出席をとる時」という意見が目立った。特に日本語クラスにおいては、本名を用いられているようで日本の学校においては本名、特に名字を主に使う習慣があるのでタイにおいての日本語クラスでも実践しているからであろう。旅行会社 SMI のスタッフの場合は、「特別に公的な会議」などという回答があった。中には、「日本人の友達から」という回答もあり、独特のニックネーム文化に少し違和感のある外国人ならではの観点に関係しているようである。

「official」というのが、具体的にどこまでなのか、定かではないが、SMI 加藤氏の話によると、仕事相手でも、初対面で大抵本名の名前は名乗るが、名字を名乗ることはほとんどないということである。不思議なタイ社会の一面である。

〔Q12〕 When are you called by your main nickname? / あなたがあなたのメインニックネームで呼ばれるのはどんな場ですか？

日常生活を送る上で、タイ社会においてチューレンが使用されていることはこれまでの回答結果からも伺え、この問いに関しても、「いつでも」、「家族、友達から」という意見がほとんどであった。とにかく、タイ社会においては、コミュニケーションを図るにお



いてはチューレンが主流であるのだ。

〔Q13〕 When are you called by your other nickname? / あなたが他のニックネームで呼ばれるのはどんな場ですか？

この問いに対する回答は、〔Q9〕でメインチューレンの他に、第2、第3のチューレを持つと答えた人からのものである。

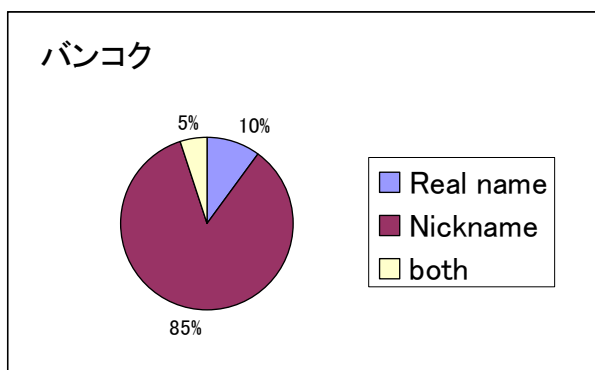
回答例

- ・ 特に親しい友人との間で(23人)
- ・ 自分と同じニックネームを持つ友人から呼ばれるとき(6人)
- ・ ボーイフレンド、ガールフレンドとの間で(3人)
- ・ 留学していたアメリカで生活していたとき(1人)
- ・ 友人が自分をからかうとき(1人)

このような回答が得られた。〔Q9〕で述べた、ネームのように、恋人同士という特別な関係の中で新たに生まれた二人だけのチューレンであったり、本当に親しく、いろんなことを許し合い、理解できる仲間内でのからかいに似たチューレンであったり。タイ人は新しいスタイルを持って第2、第3のチューレンを備えているようである。

また、新しいスタイルとは少しわけが違って、必然的にメインのチューレンとは別のチューレンを持たなくてはならないのが、自分と同じチューレンを持つ友人、知人との間柄でのやりとりの場である。やはり、同じチューレンを使っていたのでは会話上、面倒であるし、ややこしいので、識別する必要が出てくる。第2のチューレンを用いて、効率の良いコミュニケーションをはかっているようだ。このあたりは、日本においても、同じ名字、名前を持つ人同士の間では同じように、何らかの形で識別する光景が見られるのではないだろうか。

〔Q14〕 By which name do you want to be called? / あなたはどちら(本名・ニックネーム)で呼ばれたいですか？

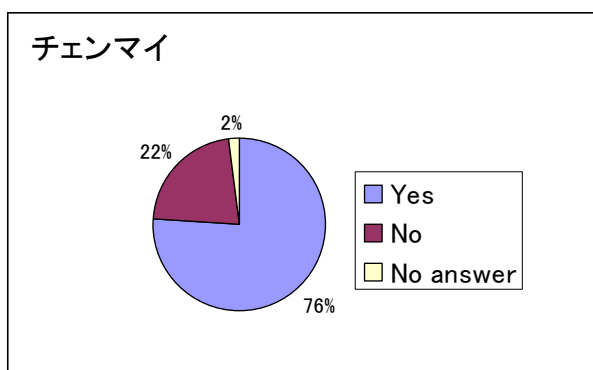
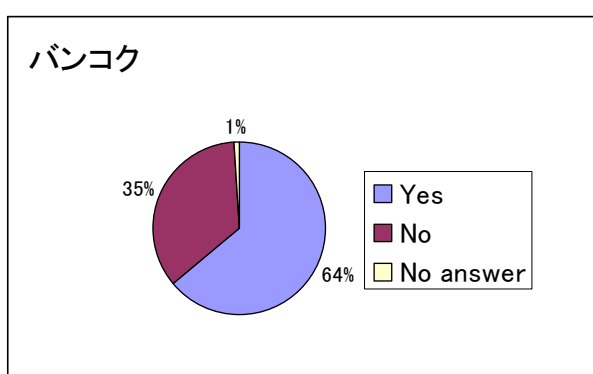


9割に近い人がチューレンで呼ばれることを望んでおり、やはりここでも、本名よりも、チューレンを重視し、愛着があることがわかる。これは、〔Q12〕で、ニックネームを使うのはどんな場かという問いに対する答えにあったものだが、



「よい関係を築きたいとき」という回答があった。とても印象に残る回答である。チューレンを使うことで、お互いの間に親しみが生まれ、それによって、人間関係が良いものへとようになっていくことの表れである。多くのタイ人がチューレンで呼んでほしいと望むのは、本名が長く、ややこしいからという便宜上の利益を考えてのことだけではなく、円満な人間関係を築きたいという意思の表れでもあるのかもしれない。

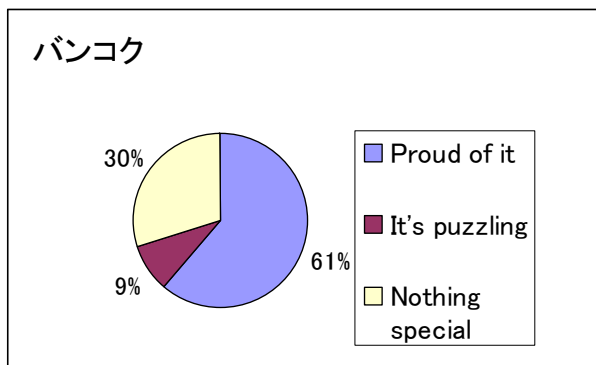
〔Q15〕 Almost Thai people have nickname. Did you know that this is a culture unique to Thailand? / 多くのタイ人はニックネームを持っています。あなたはこれがタイ独自の文化であるということを知っていましたか？



〔Q15〕、〔Q16〕に関しては、今回のアンケートにおいて、私自身、とても関心の深い質問である。果たして、このような不思議なニックネーム文化をタイ人はどれほど認識しているのか、そしてどのようにとらえているのか、とても興味があった。結果はバンコク、チェンマイどちらにおいても、6割以上のタイ人が、独自の文化だという認識をもっていることがわかった。しかし、反対に2割から3割のタイ人は、何の認識も疑問も抱くことなく、チューレン社会で生活しているのである。だが、このことは決してタイ人だけが何も自国の文化に対して希薄なわけではない。第3章で述べるが、日本は世界有数の名字大国である。しかし、このことをどれほどの日本人が認識して

いるであろうか。私が、まわりに日本の名字事情を話すと、「そうなの？知らなかった。」という反応が返って来ることが多い。タイにおけるチューレンも、日本における莫大な名字数もあまりにも日常生活において当たり前存在しているものであり、浸透しきっているので、自分が所属する社会ではこうであるが、他の社会においてはどうなのだろうかといったような疑問を抱いたり、改めて自分の文化を特別視したりする機会がない人も多いのではないだろうか。慣れとはこういうものだろうか。

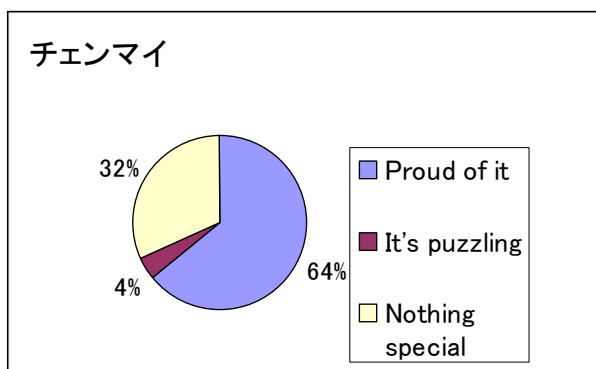
〔Q16〕 What do you think about this nickname culture? / あなたはこのニックネーム文化についてどう思いますか？



タイ人はこのニックネーム文化をどのようにとらえているのだろうか。最後に聞きたい質問は決まっていた。

これほどユニークなタイ独自の文化をどうかタイ人が誇りに思っていてほしいと願っていた。

結果、半数以上の人々が誇りに思うという回答が得られた。



本来タイ人は一般に、保守的な人が多く、古い伝統を守ろうとすることが多いようだ。また自己評価が高いというのもタイ人の気質の一つとして挙げられるのであるが、私はタイにおけるニックネーム文化はこの質問に対する回答結果が表すように本当に世界に誇るべきタイの立派な文化の一つであって当然であると思

っている。決して自己過剰に評価しているわけではないと考えている。

しかし、一方では、「特に何も思わない」という無関心な意見も全体の3割を占めた。タイ人の性格を現すことばの代表格としてよく「マイペンライ＝大丈夫、問題ない、何でもない」という語が紹介される。タイでは様々なシチュエーションで使用されることばであるが、ここにおいても、タイ人のマイペースな一面が垣間見えたといっているだろう。

周りの人間からはもちろん、いくつになっても“私”、“僕”の代わりに自分のことをチューレンと呼ぶタイ人もいる。その姿はとても無邪気に、そして微笑ましく映る。タイが微笑みの国と称され、世界各国にいる私のようなタイファンを魅了し続けるのは、豊かな自然環境や観光名所だけが要因ではないはずだ。きっとこのチューレン文化に代表されるようなフランクで気取らないタイのあり方が手伝っていることだろう。いつまでもこのような独自の文化を誇り、世界中の人々を魅了し続けるタイの姿があることを心から願いたい。

## 第3章 日本と名

日本の人名は世界でも有数の複雑さを持つと言われている。しかし私達日本人はそのことについて意識したことがあるだろうか。私自身も名について興味はあったが、日本人の名が世界においてここまで複雑で奥深いものだという認識はなかった。私達日本人の名は世界に誇ることができる文化の一つであるのだ。

この章では今現在私達日本人の名が名字と名から構成されるに至った経緯、それに至るまでの歴史的背景。そして今を生きる日本人が自分達の一番身近な存在である名をどのように捉えているのかを探っていきたい。

### 第1節 日本の名の歴史

#### 1. 古代の名

第1章でも、述べたが、有史以前の人間の名がどのようなものであったか、それは想像力を働かせるほか術はない。ただ、一定の発達段階に達した人類が共同生活を営むにあたり、名が必要になったのは当然である。

日本における名の歴史を辿るには、大和時代にまでさかのぼるといいかもしれない<sup>18</sup>。大和時代の名には、美称や尊称がつけられることが普通であった。神功皇后は息長足姫尊（おきながたらしひめ）というが、「姫」と「尊」は尊称、「息長」は地名（氏名）で、実名は「足姫」あるいは「足売（たりめ）」である。尊称のほかに、接尾語として比売・姫・媛・比黄（ひめ）郎子（いつらこ）、郎女（いつらめ）、足（たり）、比登（ひと）、女（め）、戸弁（とべ）、麻呂、雄・男（お）などがつけられる習慣もあった。君（きみ）や「子」を付す習慣も、このころから始まっている。現代でも、男と女の名前の区別が難しい名前はたくさんあるが、当初は男女共通だった。

このような長い尊称や無秩序な表記は、時代を下るにつれて少しずつ整理されたが表記そのものが大きく変化したのは、元明天皇（661～721）と嵯峨天皇（786～842）の各時代である、

和銅6年（713）5月、元明店の葉「畿内七道諸国の郡郷は好字を用いよ」とした。好字というのは、それまで万葉仮名であらわしていた地名を、漢字2字の体裁と縁起のよい名に整理するということで、中国瑞祥思想の影響である。現在の日本の地名において、漢字2字の地域名が目立つのはすでに6世紀からこのような2字化が推し進められていたからなのである。この2字化の流れは人名にも波及し、嵯峨天皇の代に皇子・皇女の名を漢字2字とする習慣は定着した。この嵯峨天皇の時代にはじまった制度こそが、長く日本人の

<sup>18</sup>本節は主に紀田順一郎『名前日本史』（2002）第二章、p.23に依拠して論述した。

命名システムの基礎となった。今から 1200 年以上も前の話である。日本人の名にはこれほどの長い歴史があるのだ。

もう一つ、古代の姓名の特徴として、氏と姓の相違がある。第一章でも述べたが、現代では「氏名」と「姓名」では同じ意味に用いられているが、古代日本では「姓」はおそらく新羅王朝の制度を真似たもので、氏族（血族集団）の家格を示す称号だった。

古代の姓氏のはじまりは、大和朝廷の成り立ちと深く関わっている。朝廷に帰属した豪族が一定の官職を分担し、世襲するようになると、朝廷からそれを示す氏と姓が与えられるようになったのである。姓は初めに大伴・物部（もののべ）など世襲の職名や部（べ）名を氏とする氏族を対象にして連（むらじ）や造（みやっこ）などの姓が与えられた。ついで、居住地の地名を氏の名とする葛城（かつらぎ）、蘇我（そが）氏などに臣が授けられた。地方の国造（くにのみやつこ）や豪族にも直（あたい）や君などの姓が与えられた。

しかし、姓氏の区別は平安時代の中ごろに成ると次第にその社会的意義を失うようになった。その理由は、本来限られた者の特権だった姓が、本家から分家へ、さらには嫁ぎ先までが同一姓を名乗るようになり、希少価値がなくなったからである、さらには荘園制度の発達により、地方の土地を所有する豪族が力を発揮する社会となり、朝廷から与えられる特別なものであった姓の価値や意味が相対的に低いものとなったせいもある。

私達現代人の命名習俗は、次にやってきた武家社会の影響を大きく受けることになるのだが、古代の名はさすがに現代とは異なるものの、全くかけ離れたものでは決してなく、今日まで伝承されてきた、古くて尊い文化の一つなのだ。

## 2. 武家社会における名

室町時代以降は、武士以外が姓氏を名乗ることは法制面でも禁じられ、以後江戸時代全期を通じ、名字を持つことは帯刀とともに武士だけの特権となり、庶民の名字使用は例外的にしか許されなくなってしまった。武士階級の確立の必要性から、権力の象徴として姓氏の独占が必要となり、記録の上で農民その他は差別的に名前のみ記されるだけとなった。

武士の姓については所領の地名に深い関係がある<sup>19</sup>。たとえば毛利元就の先祖は、相模国毛利荘から出ている、現在、神奈川県厚木市には毛利台という地名が残っているが、平安時代の毛利荘といえば、いまの厚木市の中心部を含む広大な地域であった。そこに毛利という豪族が、愛甲、本間などという有力武士団とともに勢力を競っていた。このように出身の地名を「名字の地」という。

問題は名前のほうである、動くことの少ない名字に比べて、個人の名前はじつに頻繁に変化した。武士は生まれると幼名を与えられ名乗ることになる。この幼名は通常は元服（15、6 歳以上 20 歳ぐらい）までの呼称で健康に育つようにという願いをこめ、縁起のよい名前をつけるのが本来だが、一時的な名ということで、型にはまった似かよった名になりがち

<sup>19</sup> 紀田順一郎 (2002) p.32

であった。徳川家を例にとると、初代の家康が竹千代だったということからか、家光、家治、家綱をはじめとする数名が竹千代と名づけられている。元服を終えると幼名に別れをつけ、以後は実名によって生活することになる。これは本名、名乗り、名告（なのり）といい、多くは時宗、信長、家康、吉宗などのように漢字 2 字があるが、学、清、忠、功などの一字名も多い。

ところが、ここにも実名を名乗らないようにという考え方が入り込んでくる。

ともかく、実名を呼ぶことができないのであれば、別の名をつけるほかない。これを通称といい、あるいは化名、俗名、呼名ともいった。貴族階級には通称の観念がなかったので、御堂殿（藤原道長）、堀川の関白（藤原兼道）のように居住地名や官位名で代用した。武家階級は官名だけではなく、いろいろな工夫が必要であったのだが、最も通称として利用されたのは官名であった<sup>20</sup>。「百官名」といわれるほどである、実数はとても百では数え切れないほどの種類があったようである。この百官名は長く通称に用いられ、江戸中期以降は農民、町民の間にも普及していき、明治以降にも影響しているものも多い。百官名は当時の武士中心の社会にまさにふさわしいイメージであり、武家社会の文化の象徴ともいえる。名前には権威性のほか、字面や響きなどの表情機能も要求されたからである。

ここまで述べたことは、公家社会や武家社会が中心になっていたが、一般庶民、とくに農村社会における命名の習俗はどのようなものだったのであろうか。

自分の権威性に重点をおいて、名乗りを上げていた武士とは対照的に、農民はその身分的な位置を反映して消極的な意味のものが多かった上、画一化していた、幼名はもとより、成人し、改名を行う場合にも武士のような抛りどころがなかったので、きわめて画一的で、長期にわたって変化はみられなかった。名字をもたない農民の名前は個性発揮のしどころがなく、没個性的な命名のあり方に、江戸時代の庶民の姿が反映している、日本人の名前の多様な展開は、明治の“姓名改革”を待たなくてはならなかった。

### 3. 明治時代以降における名

明治の新政府は当初へ移民に名字を許すことを考えていなかった。それどころか、幕府時代に一部の町人などに許されていた名字の特権を取り上げようとした。明治 2 年（1869）正月には「百姓町人共、旧幕府より苗字帯刀を差し免（ゆる）し、（中略）候儀、一切廃止えられ、仰せ出候こと」という行政命令が出ている<sup>21</sup>。

この直後に「通称を排し実名をもちうべきこと」という建議が行われたが、完全に無視されてしまった。当時の官吏にとって「大和守」や「～左衛門」といった通称を禁止されることは、帯刀を禁じられることと同様の抵抗があったようである。しかし、政府は徴税と兵役制度の確立には戸籍の整備が急務であり、そのためにはまず平民に名前をつける

<sup>20</sup> 紀田順一郎（2002） p.40

<sup>21</sup> 同上 p.56

ことと気づいて、明治3年(1870)9月には「自今、平民苗字差し許され候こと」という布告をだして、平民が名字を持つことを公認した上、翌年4年(1871)4月には「臣民一般」に戸籍登録を義務づけた。世に言う壬申戸籍である。それまで各府県は、江戸時代の身分取締法に則した行政を施行していたが、新体制のもとの徴兵・徴税制度には適さないとあって、全国民をその居住地にしたがって一元的に掌握するため、まず名字の整備と戸籍制度の創設を考えたのである。要するに、平民の名字許容は管理目的のたで、正確には許容ではなく、義務であったのだ。そこには平民の地位向上という視点などまったくなかったのである。

平民のほとんどはそれまで名字を用いるような機会も必要もなかったもので、何の知識も背景もないまま、いきなり名字を創作せよといわれても戸惑うばかりであった。戸籍調査は若い女性を外国人に差し出す準備であるなどといったデマが飛び交い一揆が発生した地域もあったほどだ。

従来、平民のすべてが姓を持っていなかったのではなく、たとえば私文書や私信を作成したり、村の行事、地域の神事に加わったりする際は自家の名字を連ねている例も多く見られる。あくまで公的な私用を禁じられていたというだけではあるが、壬申戸籍作成にあたって、積極的に自己の姓名を申告したものはごくわずかであった。

そして、「平民苗字差し許され候むね、明治三年九月布告候ところ、自今必ず苗字あい唱え申すべし。もつとも、祖先いらい苗字不分明の向きは、新たに苗字を設け候様いたすべく此旨候こと」という、きつい調子の通達を示した。すべての日本人が名字をもつようになった出来事である。平民苗字許容・必称義務令。明治3年(1875)9月のことであった。当時の平民の数は約3100万(全人口の93%)で、戸籍数(推定)は722万戸あった<sup>22</sup>。全人口のうち貴族、武士、神職、医師、庄屋、名主などの特権階級が約1割で、すでに名字をもっていた。名字の数にすると3万程度となる。大雑把に言えば、名字をもっていたのは10人に1人しかなく、残りが一斉に名字を求めた騒ぎは尋常なものではなかったことが想像される。現在のように情報があふれているわけではなく、よりどころになるような資料もない。文字通りゼロから姓を作りださなければならなかった。このときどのような経緯で名字を作り出したのかはこの章の第2節で述べたいと思う。

明治の初期から半ばごろまでは、日本の歴史上前例のない“姓名革命”による混乱期だったといっても過言ではない。昨日まで自由に使いわけてきた複数の名前が、今日から一挙に使用禁止にされたということは、あたかも分身を失ったような当惑と寂しさに襲われたに違いない。逆に日ごろからあこがれてきた名家の姓や名を、思いがけなくも獲得した人々はまるで世界が一変したような高揚感、もしかしたら気恥ずかしささえも覚えたかもしれない。そして同時にこの“姓名改革”は、日本における名前を窮屈なものへと密封し、身動きならない存在へととなりさがるきっかけともなった。明治23年(1890)帝国憲法の施

---

<sup>22</sup> 紀田順一郎(2002) p.58

行、ついで新しい戸籍法の制定（1898）によって、家制度が整った。かつては自分の年齢や生き方や、そのときどきの状況に応じて、ほとんど自己表出の手段のように改め、作り出すことが出来た名前が、ちょう帳簿上の管理名のように、一字を改変することさえ大きなエネルギーを必要とするものと化していったのである。

現在の日本においては名前に使える文字は戸籍法第 50 条と戸籍法施行規則第 60 条（平成 16 年 9 月 27 日改正）によって、常用漢字 1945 字、人名用漢字 983 時の計 2928 字（このうち、旧字体を使える許容字体が 205 字）、片仮名、変体仮名を除く平仮名、となっている<sup>23</sup>。また、「々」などの繰り返し記号や「ゐゑをキエヲ」、ヨーコなどで用いる音引記号の「一」は使用できる。漢数字も使用可能だが、1 2 3 などのアラビア数字、I II III などのローマ数字、それにアルファベットは使えない。読み方についての制限はないので、理屈の上では「太郎」と書いて「じろう」と読ませてもかまわない。ただし本人にすればいつも間違えて呼ばれるし、そのたびに、「名付け親が変わった名を、と付けてくれたもので。」と弁解しなくてはならず、プラスよりマイナスのほうが大きくなるのは必至だ。また親のつけた読み方がその字の組み合わせではどうしても読めないと、役所から書き直しを指示されることがある。法的な強制力があるわけではないので、役所と争う覚悟で臨めば最終的には許可されるが、親が意地を張ったために子供が苦勞するようでは考えようである。もう一点、親とまったく同じ漢字からなる名前を付けることはできないことになっている。文字数にも制限はないが、長ければいいというものでもない。

明治の名字許可令は先に述べたように、改姓禁止令とセットになっており、今の日本においては、名字の場合は「やむを得ない事由」、名前の場合は「正当な事由」に限り、改称を認めることとなっている<sup>24</sup>。名を変えるというのは大きなエネルギーを必要とし、そして決して容易なことではない。日本がこのように改姓・改名の敷居を多角している理由は、むやみな変更が選挙や徴税などの行政事務、あるいは取引上の支障となること、戸籍制度の円滑な運用を害する、犯罪に悪用されかねないなどということにあり、審判にあたっては個人の利益と社会の利益を公平に比較し、犯罪等の目的が存在しないかどうかを見極めることになっている。

## 第 2 節 名字大国日本—名字からみえてくるもの

左の表からもわかるように、日本は世界に冠たる名字大国である。平成 9 年発行『日本苗字大辞典』（芳分館発行・丹羽基二著）によると現在日本には 291,129 件の名字があるといわれている。西ヨーロッパ、中国など他の民族にも、日本の名字に似た、家々を区別する符号はある。しかし、それは一つの民族でせいぜい数百程度の、日

表 1 名字数の世界ランキング

1	アメリカ合衆国
2	日本
3	フィンランド
4	イギリス
5	中国

<sup>23</sup> 野口卓（2005）p.68

<sup>24</sup> 戸籍法第 107 条

本のものにくらべてはるかに単純な形をとっている。つまり、この数字は日本の文化の一つの特色ともとることができる。1位のアメリカ合衆国は多民族国家ゆえのことであろう。正確ではないが、100万をこえる名字があるといわれている。2位の日本が約30万、次ぐフィンランドになると、がくっ、と名字数は6万にまで減る。4位のイギリスが1万数千。同じアジアに属し、世界最大の人口を抱える中国は10,129の名字が存在する。ちなみに、日本の隣国、朝鮮半島の韓国において名字数は300しかなく、そういえば、最近の韓流ブームでよく耳にする韓国人の名字はどこか似たもの、同じものが多いような気がするのも納得である。それにしてもこんなに膨大な数の名字がどのようにして誕生することになったのだろうか、その中でも、特に多い名字、「佐藤さん」、「鈴木さん」たちが多いのはどうしてだろうか。自分の名字を意味するものは何なのだろうか。私の中でいつしか名字にまつわる数々の疑問が浮かび上がってきた。

日本において名字が辿ってきた歴史はこの章の第1節で述べたとおりである。古代の農民は大伴部（おおともべ）、日下部（くさかべ）などの「姓」をもっていたが、のちにそのような姓を失い、鈴木、佐藤といった武士が広めた「名字」を代々伝えるようになった。これは、武家支配の成立によって日本が一つにまとまったことを意味するものである。ゆえに、名字の発生は、武士の登場と鎌倉幕府の成立にかかわる日本史上の重要な出来事としてとらえられべきなのである。

名字は、私たちの日常生活に欠かせない身近なものである。ところが、その正体は極めてわかりにくい。

表2 名字数の日本ランキング<sup>25</sup>

順位	名字	1000人中の人数
1	佐藤	15.83
2	鈴木	13.32
3	高橋	11.32
4	田中	10.61
5	渡辺	10.07
6	伊藤（伊東）	9.90
7	中村	8.64
8	山本	8.56
9	小林	8.12
10	斉藤	7.99

まず日本人の名字のありかたには、大きな偏りがある。日本の人口の10%余りが、「十大姓」とよばれる「鈴木」、「佐藤」などのもつともありふれた名字を名乗っているとされる。そして、上位100位の名字をもつ者は日本の総人口の22%になるといわれる<sup>26</sup>。ありふれた名字は名付けやすいことは確かである。しかし、この事実はかつて特定の名字を広めた特別の人間の営みがあったのではないかと思われる。

表2は第一生命広報部の調査による日本の多い名字のランキングである。（『日本全国苗字と名前おもしろBOOK』垣友出版社刊）この10の名字のうち「田中」、「山本」、「小林」、「中村」といった名字ならば地形もしくは地名から思いついたと考えることも出来る。名

<sup>25</sup> 同上 p.26 第一生命広報部の調査より作成

<sup>26</sup> 武光誠（1998）p.24



字と地名とは深いかかわりをもっていることは事実である。

「名字は地名から作られる」

という原則を押さえておくといわれている。地名から発祥した名字は全体の 70%前後になるであろう。そして、名字にちなんで付けられた地名が残る 20%ということになる<sup>27</sup>。しかし、「鈴木」、「佐藤」、「渡辺」、「高橋」といった言葉が日常生活の中で考えだされたとは思えない。名字について語る場合、まずそれがどのような経緯で作られたかを知る必要があるが、今日その問いに正確に答えられる歴史学者は一人もいない。

しかし、それでも、各名字の起こりの背景については様々な論争が飛び交っている。ではここで、日本で一番多い名字とされている「佐藤」の名字の起こりとその広まりについて考えてみたいと思う。日本で「鈴木」と並ぶ有力な名字である「佐藤」は藤原秀郷の子孫にあたる藤原系の武士が名乗った名字である。秀郷の五代目の子孫にあたる藤原公清、公脩（きみなが）の兄弟が、祖先の秀郷が下野国佐野庄（いまの栃木県佐野市）の領主であったことにちなんで「佐野」の「佐」と「藤原」の「藤」とをあわせた「佐藤」を名字にした。秀郷の流れをひく佐藤家の武士たちは、主に東北地方に根を張って成長した。前にあげた第一生命広報部の調査では、宮城県では 1000 人中 65.89 人、秋田県では 71.04 人、山形県では 69.38 人、福島県では 52.28 人が佐藤の名字をもつことになっている。佐藤の名字は東北地方に集中しているのである。そういえば、私が生活する九州、特に長崎ではそれほど多い名字だと感じる機会はありません。特殊な事情のない県なら、そこのもっとも有力な名字であっても、その割合は 1000 人中 10 数人もしくは 20 人程度にすぎない。佐藤の名字の広まりは、佐藤と名乗った村落の領主が、支配下の農民に気前よく佐藤の名字を与えたことを示している。多くの村落では、佐藤の名字を名乗ることが、小作人でも下人でもない独立した農民であることを示すものとなっていたのであろう。

このように一つの名字をとって見て、その起こり、そしてどのように広まったかが伺えるのである。佐藤の名字をもつ者の中で間違いなく藤原秀郷の子孫である人は、ごくわずかであるはずだ。今現在万人いる佐藤さん中には、藤原秀郷の子孫である人もいれば、室町時代に領主から佐藤の名字をもらった農民層の家で、勝手に系図を買って、自家は秀郷の流れをひくと唱えた人物の子孫である人もいる。古来佐藤さんはとても気前の良い人だったのだ。一つ一ついわれを辿ってみると今まで知らなかった、見えてこなかった自分の先祖のルーツ、事実が見えてくるものだ。中世以来の伝統を背負っている名字文化は現在の日本のかなりの人の先祖の由来について推測することができるのである。

現代では、多くの人が名字と家系とのかかわりについて無関心になっているが、自分の名字は何を意味し、何を辿り広まったものなのか推測してみる、こうして物思いにふけることができることも名字の魅力の一つでもある。全国約 30 万にもおよぶ日本の名字の数々はそれぞれいったいどのような背景と経緯をもって今日まで受け継がれてきたのだろうか……。

---

<sup>27</sup> 武光誠 (1998) p.37

### 第3節 大学生と名—アンケートからみる現代日本人の名に関する意識

#### 1. アンケート調査の目的と概要

日本人の名にはこれまで第1節で述べたように古く、伝統的な歴史と、第2節で述べたような世界には例をみない複雑な歴史、しくみをもった名字文化がある。このような日本の一つの文化である名を現代ではどのように捉えられているのであろうか。現代日本の私と同じ大学生の間では名はどのように意識され、使用されているのであろうか、知りたいと考えた。タイでも同じようにアンケート調査を実施することを考えていたので、タイと日本、二つの国の名に関する意識や使用方法を比較することも考え、今回アンケート調査を実施した。

#### a. アンケート用紙

## 名まえについてのアンケート

卒業論文制作にあたり、“名”に関して研究をすすめています。

このアンケートは研究以外の目的には使いません。

匿名で結構ですので、ご協力お願いします。

年齢( ) 性別 男 / 女

あなたはニックネーム、あだ名をもっていますか？

1. はい      2. いいえ

☆はいと答えた人↓

Q1. ニックネームをつけてくれたのは誰ですか？

1. 両親      2. 友人      3. その他( )

Q2. ニックネームは何にちなんでつけられたものですか？

( )

Q3. 本名とニックネーム、どちらで呼ばれることが多いですか？

1. 本名      2. ニックネーム

Q4. 本名を用いるのはどのような場ですか？

( )

Q 5. ニックネームを用いるのはどのような場ですか？

( )

Q 6. 自分のニックネームを気に入っていますか？

1. はい 2. いいえ

※気に入っている理由、気に入らない理由を教えてください。

( )

Q 7. ニックネームがあつてプラスだと感じることはありますか？

1. はい・・・( ) な時  
2. いいえ

☆ いいえと答えた人↓

Q 1. ニックネームやあだ名がほしいなと感じたことはありますか？

1. はい・・・( ) な時  
2. いいえ

[あなたの本名についてお訊ねします。]

Q 1. あなたは自分の本名が好きで、親しみを感じていますか？

1. はい：理由 ( )  
2. いいえ：理由 ( )  
3. どちらでもない

Q 2. あなたの名字は何に由来しているか知っていますか？

例：田中さん・・・“田んぼの中” という地形に由来する など。

1. はい 2. いいえ

Q 3. あなたは自分の家紋を知っていますか？

家紋の例：

1. はい  
2. いいえ

**Q 4. 自分の名まえ (first name) が気に入っていますか?**

1. はい：理由 ( )
2. いいえ：理由 ( )

**Q 5. 自分の名前を変えたいと思ったことはありますか?**

1. はい：理由 ( )
2. いいえ

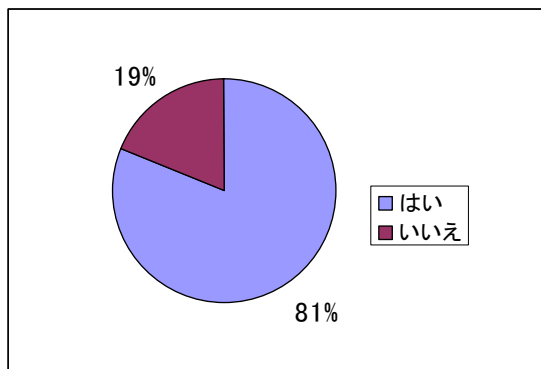
ご協力ありがとうございました。 教育学部 情報文化教育課程  
クロスカルチャーコース4年 東 由佳梨

**b.対象 (回答数)：長崎大学に通う大学生 男女各 50 名**

2005 年 11 月。長崎大学文教キャンパスにおいて、学生食堂やピロティなどに集まる学生に声をかけ、アンケートに協力していただいた。タイの学生と同じように快くアンケートに協力して下さった長崎大学の 100 名の学生の皆様には感謝の意を述べたい。

**2. アンケート調査結果**

[あなたはニックネーム、あだ名を持っていますか?]

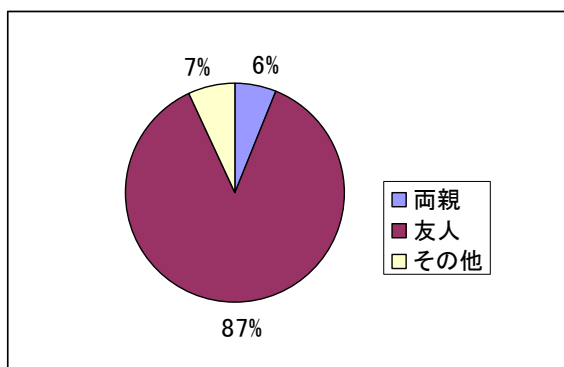


まず、日本でも、タイと同様にニックネームを持っているかという質問。この問いに対しては、私が想像していた以上の人から「はい」という回答があった。男女比であるが、男性の場合は 74%、女性の場合は 88%が「はい」と回答。残りが「いいえ」だった。女性の方がニックネーム、あだ名を利用しているということになるが、この

事実は、これまでの普段の自分の身の回りをみても、明らかなことで、女性の方がどちらかというかしこまった、名字や名前よりも少し親しみをこめた内輪だけのニックネームやあだ名を持つ傾向がうかがえるものである。前にも述べたが、私には幼い頃から、「東さん」、「由佳梨ちゃん」と呼ばれる他、特別なニックネームやあだ名はなかったので、この「はい」と答えた 88%は、予想していた以上に大きな割合である。

次に、ここで「はい」と答えた人に対する質問と調査結果である。

〔Q1〕 ニックネームをつけてくれたのは誰ですか？



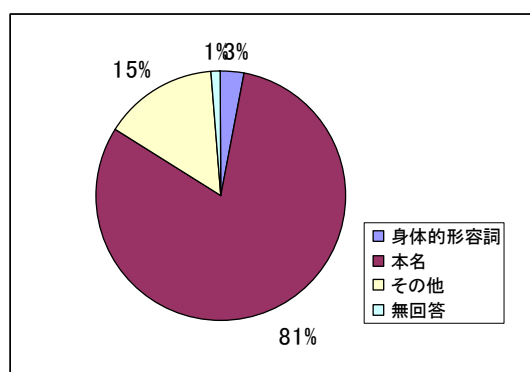
この質問への回答結果はタイのものとは大きく異なる結果となった。タイではニックネームの名付け親が「両親」と答えたのが 86%にのぼり、日本で一番多い、「友人」という回答はわずか 6%であった。

日本では「友人」という回答が 87%。私の周辺にも小学、中学、高校、大学の友人あるいは趣味の集まりや遊び仲間

に対して、やたらとニックネームをつけるのがうまい友人がいた。不思議なことに各学年、クラスに一人はいて、その男の子、女の子がつけたあだ名は口を離れた瞬間に定着してしまう。その人物の名前の響きの特徴や、あるいはその人物の容姿の特徴をとらえたそのニックネームはいっきに広まっていく。

この調査結果から、日本人におけるニックネームの特徴の一つが浮かび上がる。タイでは生まれると同時に本名の名と共にニックネームが与えられ、本人の情緒が発達していない時点、物心つかない頃からニックネームと付き合いしていくのであるが、日本においては違う。ニックネームを持つ人のうち、大多数が学校やアルバイト先など一つの社会に属してからもつ傾向にあるようだ。

〔Q2〕 ニックネームは何にちなんでつけられたものですか？



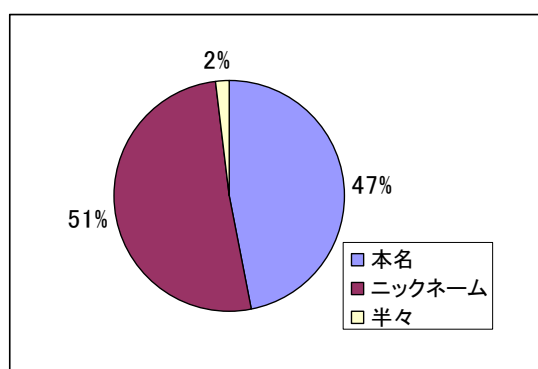
ここでは、タイのアンケートのように、あらかじめ由来を示す選択肢は挙げなかったのだが、結果として現れたのが、グラフからもわかるように本名に由来するものであった。最初の質問「あなたはニックネーム、あだ名を持っていますか？」というニックネームの中には、本名にちなんだものも含むとしていたのだが、日本におけるニックネーム

という、本名から少しニュアンスを変えたものが主流なようである。その他の回答で目立ったのは、芸人か偉人というものが多かった。これは、たとえば、自分と同じ名字や名前を持つ芸人や、芸人や偉人にどこか容姿が似ているからということである。

私が中学 2 年生のとき、同じクラスの男の子が体育の時間になにげなくとったガッツ

ポーズが印象的で、そこからニックネームが「ガッツ」になった子もいた。本名からとられるニックネームが大多数ではあるが、日本においてニックネームとはタイに比べ軽視されているため、ニックネームが含む経緯や使用方法に対する意識が低く、そのことは同時にニックネームが自由奔放に飛び交うことへとつながる。いつどこで何からニックネームがつけられるかわからないのだ。

〔Q3〕 本名とニックネーム、どちらで呼ばれることが多いですか？



およそ呼ばれる頻度は半々の割合であることがわかる。今回アンケート調査の対象が学生だったことも考えられるが、生活する上で、関わっていく人が半分は本名を用いるような間柄、半分はニックネームでも通用する間柄であるということであろうか。この回答は男女間でもまったく同じパーセンテージであり、一度ニックネームをもつ

と、使う頻度は男女間でさほど変わりはないということである。

〔Q4〕 本名を用いるのはどのような場ですか？

回答例

- ・ アルバイト先で (11人)
- ・ 自己紹介の場、初めて会った人と話す時 (8人)
- ・ 先生、目上の人と話す時 (6人)
- ・ 授業中 (4人)
- ・ 親交が深くない人と接する時 (4人)
- ・ 就職活動時 (2人)
- ・ 機嫌が悪い時、怒られる時 (1人)

タイでのアンケートの調査結果にも見られた言葉であるが、「公的な」という回答が多かった。実際どのような場を公的な場ととらえているかということ、病院、学校、アルバイト先、就職活動時など、社会的なことが絡むと日本の大学生は“公的”だと感じているようだ。タイとの違いは日本の学生がとらえている“公的”な場の範囲が少し広いということだろうか。また、「自己紹介時」、「初めて会った人と話すとき」という回答も多かった。タイでは自己紹介時からチューレンを名乗るのが一般的なので、ここでも日本とタイとの違いを見ることができる。

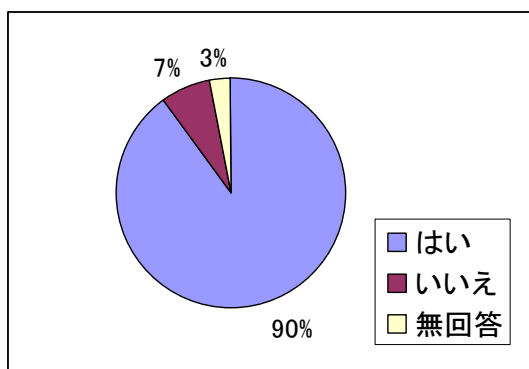
〔Q5〕 ニックネームを用いるのはどのような場ですか？

回答例

- ・ 友達、親しい人との会話時 (53人)
- ・ サークル、部活内で (5人)
- ・ 気軽に話しかけられる時 (1人)
- ・ 研究室で (1人)

多くの人から「友人同士でいるだけでいい」という回答が得られた。ここでいう、友人は友人でも、特に親しい友人ということになる。日本においてニックネームで呼び合う仲になるまではワンクッションある感じがする。また、日本では親しいといってもニックネームで呼びあう仲に家族が含まれる人は少ない。これは、ニックネームの名付け親の8割以上が友人であることが関係していることだろうが、両親は本名の名前の名付け親であるので、ニックネームよりも本名の名前の方に愛着があるからではないだろうか。

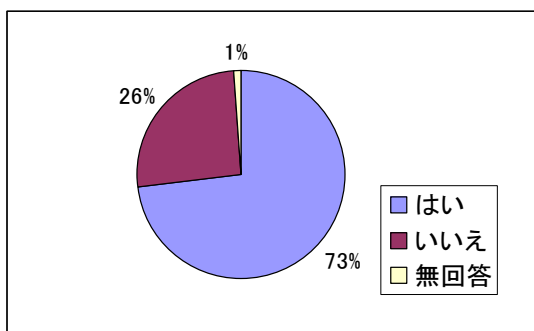
〔Q6〕 自分のニックネームを気に入っていますか？



日本でもニックネームを持つ9割以上の人  
が自分のニックネームに対し、愛着をもっていることがわかる。気に入っている理由としては、「ニックネームで呼ばれると親近感を感じる」、「インパクトがあり覚えてもらいやすい」などの回答があり、ニックネームがあることによって、人間関係の広がりが容易になること、円満になることへのつながりを期待した意思が感じられる。

逆に気に入っていない人の理由には、「悪いイメージだから」、「かっこ悪いから」というものがあり、いくら自分のニックネームであるとはいえ、誰もが本人の納得の上でニックネームを使用しているわけではないということがわかった。

〔Q7〕 ニックネームがあつてプラスだと感じることはありますか？

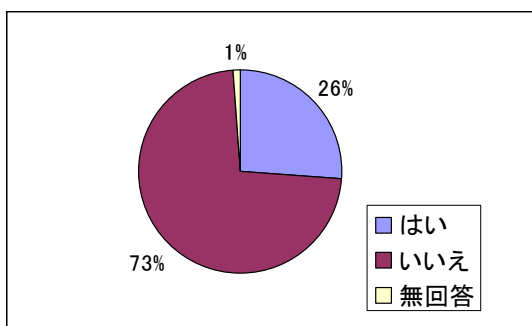


ニックネームを持っていない私は、きっとニックネームがあることによって、友人に覚えてもらい易い、など様々な面でプラスになることが多いのではないかと予想していた。しかしこの結果を見るとそう感じているのは

10人中7人で、ニックネームを持つ人の中には特に利点があると意識していない人もいるようだ。もちろん、「はい」と回答した人の中には、「親近感がわく」、「本名だとありきたりな名前がちょっと変わった感じになり嬉しい」などの意見もみられた。中には、「急いでいるとき」と、ニックネームの手軽さをプラスに感じている人もいた。

ここまでがニックネームを持っている人に向けた質問である。  
ニックネームを持っていない人に対しても質問をした。

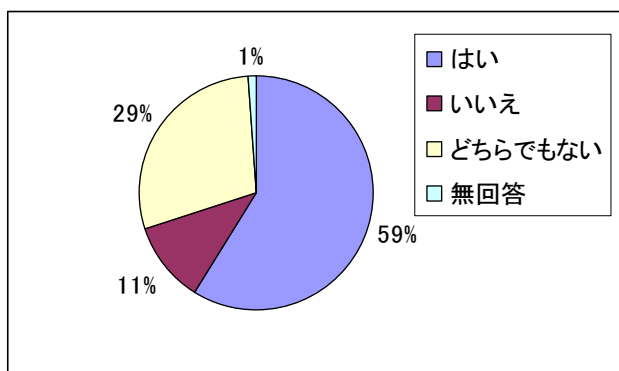
〔Q1〕ニックネームやあだ名がほしいと感じたことはありますか？



私はニックネームを持っていないので、アンケートに回答するのであれば、この質問に対して回答することになるのである。私の答えは「はい」なのであるが、私の予想とは裏腹に、ニックネームを持たない人達は、特にニックネームをほしいと感じている人ばかりではないことがわかった。日本で社会生活を営むにあたり、ニックネームがないからといって社会的に困ることは無いので、これまでも、そしてこれからも特に必要性、重要性を感じないのであろう。「はい」と答えた人の具体的な理由としては、「合コンとかでもすぐあだ名で呼ばれ、仲良くなれるはず」という学生らしい意見もみられた。日本においてニックネームはあると便利で愛着もわくのだろうが、無ければ無いで特に支障はないというのが実情であるようだ。

次の項目からは本名について尋ねたものである。

〔Q1〕あなたは自分の本名が好きで、親しみを覚えていますか？

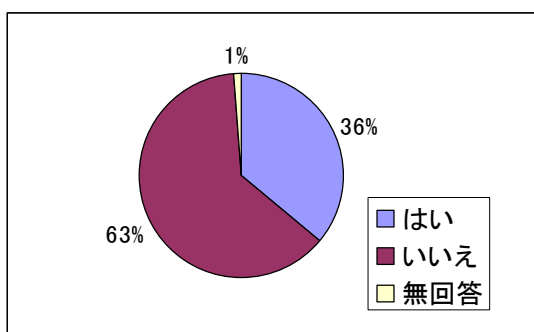


「はい」との回答が半数を超えたものの、ニックネームを気に入っていると答えた割合は9割を超えていたので、それに比べると、意外にも本名に対する愛着心はそれほど高くないようである。また、予想していた以上に多かったのが「どちらでもない」という回答である。自分の名前自体には、特に気



に入っている点などはないが、両親が自分のためにつけてくれたものだから嫌いではないし、というちょっとした葛藤状態に置かれている人もいるようだ。「はい」と答えた人の理由には、「〇年間この名前と共に生きてきたから」、というものが一番多く、社会生活では本名を主に使うのが現状である日本においては納得がいく意見であった。

〔Q2〕 あなたの名字は何に由来しているか知っていますか？



第2節でも述べたが、現代では多くの人が名字と家系との関係について無関心になりつつある。この質問に対する回答結果を見れば一目瞭然である。半数以上の人自分の名字が何に由来しているのか知らないのが現状なのである。しかし、これからも、自分の名字が何に由来するのか、どのように広まって

いったのか不思議に思い、自分の名字の歴史を辿る人はほとんどいないであろう。特に変わった名字でない限りは。最近ではテレビでも、名字に関する特集が組まれ2時間かけて放送されることもあったが、名字が身分や家柄を表す符合であった時代の影はだんだんと薄くなってきているのは確かであり、人々の意識もそれと比例して薄くなってきているのである。

〔Q3〕 あなたは自分の家紋を知っていますか？

図1 家紋の一例<sup>28</sup>



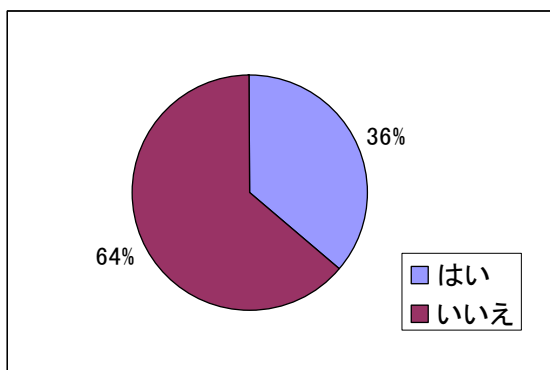
この質問は先の〔Q2〕との質問と関連している。家紋とは、名字と同じく代々受け継がれるその家独自の文様で、家系を知る

重要な手がかりとされる。家紋は世界の中で日本とヨーロッパの諸国だけにしかみられない。そして、その二地域の家紋は互いに何の関係もなく独自に発生した。現在日本に二万通り余りの家紋があるといわれる。一般的に家紋の意匠は、その家の由来と深く関わり、似た家紋をもつ家どうしは系譜的に近いとされる。家紋の広まりは、家の成立や名字の使用と深い関わりをもっているのである。

すなわち自分の家の家紋を知っているかどうかは、自分の名字の由来を知っているかどうかと関連してくるのではないかと、そして現代の人達の間で家紋がどれだけ認識されてい

<sup>28</sup> 「家紋 world」 <http://www.harimaya.com/kamon/index.html> より

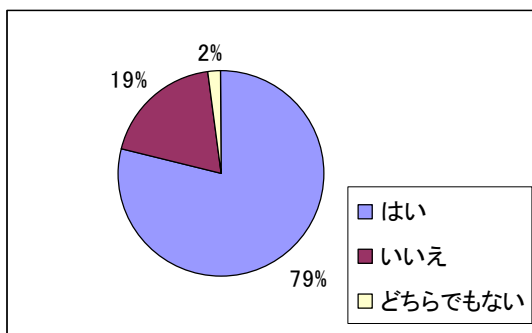
るのか知りたいと思いこの質問を投げかけた。



結果は見事に〔Q2〕の回答結果と結びつくものであった。ここでもやはり、家紋はもちろん、自分の家系、自分の家が代々受け継いでいるものに対する意識が薄くなってきていることが伺える。学生という立場から、墓を守る、家を守るという意識がまだ芽生えていないことも関係しているのであろうが、長年受け継がれてきたものに対し、意識が薄

くなっていくというのはどこか寂しさを感じた。

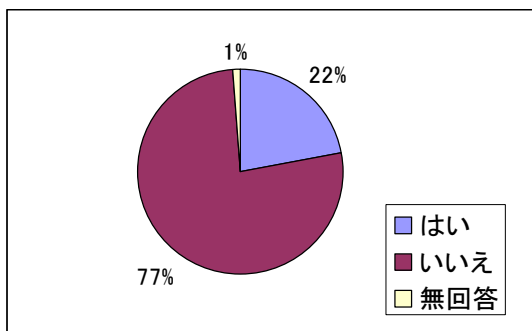
〔Q4〕自分の名まえ (first name) が気に入っていますか？



ここで尋ねたのは、世界で自分だけが持つ名前のことである。8割に近い人が自分の名前に対して愛着があるようである。「自分に似合う名だと思えるようになったから」、「名にあった人格に近づいていきたい」という主観的な意見もあれば、「かっこいいと言われるから」、「めずらしいと言われるから」といった客観的な意見を尊重する回答も目立った。

逆に「いいえ」と答えた人の理由としては、「三文字がよかった」、「気に入るほどの名ではない」など、の意見も挙がった、大多数の人が、両親、または名付け親が自分のために考え与えてくれた、生まれてはじめての大きな贈り物に対し、愛着を感じていることがわかった。

〔Q5〕自分の名前を変えたいと思ったことはありますか？



これまでの質問回答の流れで、日本においても、それぞれが自分のもっているニックネームや名に対し愛着をもっていることがわかってきたので、この質問に対する回答結果も驚く変化は見られない。自分の名前を変えたいと答えた人の理由としては、「今の名前よりも可愛いと思う名前があるから」、「よく漢字

を間違われるので簡単な名前にしたい」といった、名前をより良いもの、自分に親しみを  
感じられるようにしたいという意見があり、名からみる家系や由来に対する意識が薄くな  
ってきてはいるものの、個々のもつ名前に対しての意識はさほど低くなってきてはいない  
と感じた。「いいえ」と答えた人が8割近くにのぼるのは、自分の名前に対して愛着があっ  
てのことであると信じたい。

## 第4章 タイと日本—名の先に広がるもの

誰もがニックネームを持つ国、タイ。世界に冠たる名字大国、日本。

人間が名を持って生活するという事実は同じなのである。しかし、タイと日本、それぞれが持っている名にまつわる現状は本当にそれぞれの価値観、文化を象徴するものだという思いは日に日に強くなり、今では私の中でそれははっきりとした確信に変わった。



今春大学を卒業し、4月から私は社会人になる。就職先は世界各国にチェーン展開している飲食業である。タイにも展開されているので、2005年二度目のバンコクを訪れた際には、バンコクにある何店舗かのお店をまわってみた。同じドレスコードに身を包んでいるタイ人スタッフであったが、私はすぐにエプロンの胸元につけられた缶バッジに目がとまった。タイのスタッフは全員が胸元に自分のチューレンが書かれた缶バッジをつけていたのだ。念のために、私は「あなたのチューレン《タイのスターバックスのスタッフ》 すか？」と尋ねた。答えはイエスだった。私達日本で働くスタッフは名札をつけない。日本で働く私達には考えられない。

これだけ世間でプライバシーの問題について騒がれているので、名札をつけないのは正当だと思っていた。だから驚いた。そして少し羨ましいとも思った。ホテルなどと比べると若干カジュアルなサービス業であるのでお客さんからその名札に書かれているチューレンで呼ばれ、コミュニケーションを図り、信頼関係を築く上でとても有利なことに感じられるからだ。私だって顔なじみであったり、名を、さらにニックネームまで知っていたりする店員がいるお店には自然と足が向いてしまう。実際、コーヒーを飲みながらゆっくり店内でくつろいでいると、常連のお客さんだろう、スタッフをチューレンで呼び、10分以上も楽しそうに会話している姿を何度も見かけた。私が知っている限り、日本で仕事中に私語を交えた会話が10分以上続くとも多少の注意を受けるのが当たり前だが、タイでは違う。タイの職場では、お客さんを相手にしても、サービス業に限らずともスタッフ間においても私語が日本よりも多い。しかし、決して仕事をおろそかとしているわけではない。タイの文化なのだ。私がこのタイのお店で目にした光景は、私が理想としていた空間である。

日本に戻り、私は会社にこの事実を話し、「日本では名札をつけませんよね。」と言うと、日本で自分の名が書かれたものをつけるのは非常に難しい、という答えが返ってきた。最近のメディアでは特にプライバシーに関する問題がよく取り上げられているが、以前ストーカー被害などの事件に巻き込まれたスタッフの問題を考えると、これから先もおそらく名札をつけることはないだろう、とのことだった。私の就職先の企業に限らず、日本では多くの企業で常に、最悪の事態や不測の事態を予測して、危機管理の意識を徹底している。

では、タイではそのような事件に絡むような事例が全くないかとういうと決してそうではない。しかしタイ人は将来に対して非常に楽観的だ。どちらかと言うと、悲観的に考え、何か問題が起きてはいけないとあらゆる周りの目に対しアンテナを張り続ける日本人とは正反対といっても過言ではないかもしれない。日本人の私から見るタイ人は細かいことは気にしないし、気楽であり、常に笑顔で明るい性格だという印象が強い。私が抱く印象のようなタイ人の気質と私達日本人が生まれもった堅実でまじめな気質。両国の気質の違いは名札をつけるか、つけないか、この一点にも明らかに反映されている。

ここまで述べると、タイの良い点ばかりを際立たせ、日本は堅実すぎてホスピタリティに欠けているようにばかり言っているようであるが、日本には日本の、古代から受け継がれる名にまつわる素敵な文化がもちろん存在する。

2006年1月。祖母が亡くなった。祖母の遺品の中からは私の幼い頃、父の幼い頃の写真が出てきたが、その中には、戦時に撮られた、先に亡くなった祖父や祖母、さらに祖母の母やさらに古い写真も含まれていた。初めて目にした写真をみながら、私は伯父といろいろな話をした。伯父は家系図を書き始めた。その家系図と伯父の話の中には今まで知らなかったたくさんの事実があった。名字とそれぞれの名前を辿り、なぜ私たち一家が“東”という名字を持つようになったのか、このことは以前から不思議に感じていたので多少の知識はあったが、純粹九州一家だと勝手に思いこんでいた私は祖先が山口県の見島の出だということ、そして見島は古くは日本の海賊の秘密基地だったかもしれないという噂もあること。たくさんの新事実を得ることができた。「もしかしたら俺たちの祖先は海賊かもしれない！」と話す伯父の話しには確かな真実性はもちろんないのだが、同じ血をひき、同じ名字をつなぐ人間と自分達の祖先のことを思い想像を膨らませるのはとても意義のあることだと感じ、貴重な時間であった。

日本人が多様な名字を伝えてきたことは、私たちがそれを祖先からのメッセージとして重んじ続けたことを意味する。名字から現在の日本のかなりの人の先祖の由来について推測することが可能なのである。先祖がどんな過程、思いで今自分が受け継いでいる名字を名乗り始めたのか、そして名付け親が期待をこめて付けた自分の名前に時代そのものの理想、価値観、感性がどれほどこまれているか。改めて考え直してみたい。わずか4,5字の名の中には古代から、そして長い日本独自の武家社会の歴史、明治に入ってきた西洋文化の受け止め方。日本が辿った全ての歴史と、日本人ならではの細かさ、世間体に対する協調性や堅実さ、理想を高くする日本人特有の良い意味でのストイックさが見えてくる。

名には各々の歴史的事情、価値観、理想が封印されている。その封印を破れば、思いがけない奥行きのある世界が開けてくる。微笑みの国タイが持つ人間関係を円満にする潤滑油のような役割を果たすニックネーム、チューレン。世界でも有数の複雑さを持つといわれるが、歴史的に展望したり、別の視点から見直したりすれば、複雑さが大きな魅力となってくる日本の人名。現代において名を持つということは当たり前すぎて名に対する意識は薄くなってきているかもしれない。しかし、そんな現代を生きる人にこそ、少しでも自

分の名が辿った過程、自分の名が持つ意義を考える時間をとってほしい。きっと自分の名に対する見方も変わってくるに違いない。

名は人間が存在し、社会生活を営む上で、一人の人間が他の人間・物と異なったものを備えるという独自性・同一性の象徴、アイデンティティーなのである。

人名。何よりも尊く、深いものだ。

## おわりに

きっかけは自分の名だった。

そこから、人間が生活する上で、一番身近なものである名について、研究を進めてきた。研究というよりは名についての歴史や現状を知り、考えをめぐらせることは私の生活の一部となり、徐々に大きなものになっていった。

そして、思いがけず出会ったタイのニックネーム文化。タイで目にした光景、出会った人々と過ごした時間。協力していただいたアンケート調査の結果から得た衝撃はこれからも決して忘れることはないだろう。

この卒業論文に取り組み、制作するにあたり、私は多くの方々に協力を頂いた。協力いただいた全ての方々に感謝の意を述べ、この論文を締めくくりたい。

## 《参考文献》

- 紀田順一郎 (2002) 『名前の日本史』 文春新書  
武光誠 (1998) 『名字と日本人—先祖からのメッセージ』 文春新書  
田中克彦 (1996) 『名前と人間』 岩波新書  
野口卓 (2005) 『名前のおもしろ事典』 文春新書  
泰日経済技術振興協会(2003) 『日本 クロスカルチャー タイ』 東芝国際交流財団助成  
いい旅・街歩き編 (2003) 『いい旅・街歩き⑨タイ』 成美堂出版

## 《インターネット》

- 「世界の旅」 <http://www.uraken.net/world/bts.html>  
「外務省」 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/>  
「フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』」  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/>  
「スタディインタ일랜드」 <http://www.studyinthailand.com/>  
「タイの台所」 <http://www.allied-thai.co.jp/index.shtml>  
「家紋 world」 <http://www.harimaya.com/kamon/index2.html>

## 《新聞》

- 『西日本新聞』